

小・中学生の生活実態調査

— 京都の子どもたち3000人の“今” II —

昨年度、子どもたちの学校のある日の生活の実態や意識を、調査研究した。その結果、家庭生活と学校生活が深く関連していること、また、充実した家庭生活を過ごしている子どもとそうではない子どもがいることが指摘できた。

そこで本研究では、特に土曜日・日曜日の子どもの生活の実態や意識の現状について基本的な項目に絞り、質問紙調査を実施した。

調査の結果を報告するとともに、生活と意識との関連についても考察し、学校の在り方や家庭生活に対する支援の手掛かりを提示する。

目 次

はじめに 1

第1章 研究の概要

第1節 子どもの生活の現状

- (1) 昨年度の調査研究から 1
- (2) 各種先行調査研究から 1

第2節 調査研究の概要

- (1) 調査の構造および設問の構成 3
- (2) 調査実施の概要 5

第2章 子どもの休日の暮らしの実態

第1節 休日の活動の実態

- (1) 休日の活動の概要 6
- (2) 学年ごとの特徴的な活動の考察 11

第2節 休日の生活と学校生活

- (1) 「学習塾に行くを含めて、勉強する子ども」と「それ以外の活動をする子ども」 20
- (2) 休日の生活と学校生活との関連 22

第3節 休日の暮らしと子どもの意識

- (1) 子どもの意識の全体像 24
- (2) 子どもの「生活」と「意識」 25

第3章 豊かな子どもの成長を願って

第1節 家庭生活を見つめ直す

- (1) 土曜日・日曜日の昼食 30
- (2) 日曜日の就寝時刻 32

第2節 学校生活を見つめ直す

- (1) 授業や学校の楽しさ 32
- (2) 豊かな成長への支援の視点 34

おわりに 34

付表 基礎集計表 35

<研究担当> 川 田 雅 康 (京都市総合教育センター研究課研究員)

<研究指導> 外 川 正 明 (京都市総合教育センター研究課指導主事)

<調査協力校> 京都市立鞍馬小学校 京都市立養徳小学校 京都市立西京極小学校
京都市立広沢小学校 京都市立松尾小学校 京都市立山階南小学校
京都市立桃山小学校 京都市立新町小学校 京都市立朱雀第八小学校
京都市立東和小学校 京都市立高倉小学校 京都市立伏見板橋小学校
京都市立祥豊小学校 京都市立大宮小学校

京都市立下鴨中学校 京都市立旭丘中学校 京都市立西陵中学校
京都市立松原中学校 京都市立桃山中学校 京都市立花背第一中学校
京都市立月輪中学校 京都市立郁文中学校 京都市立花背第二中学校
京都市立洛南中学校

はじめに

「みやこ子ども土曜塾」、平成16年9月18日、京都市教育委員会が学校週5日制で休日になった土曜日や長期休業期間に、子どもの学習や体験活動の場を提供することを目的として始めた取組である。この取組は、平成14年度に完全実施された学校週5日制をさらに意義あるものとするために、子どもに社会体験、自然体験を提供する学校以外の受け皿として、保護者や地域社会とも連携して取り組んでいこうとするもので、今、改めて土・日の過ごし方に注目が置かれている。

子どもたちの生活実態については機会あるごとに取り上げられる。例えば、京都府教育委員会の調査報告では、親子が土曜・休日の過ごし方を話し合った割合は、年ごとに少しずつ増加し、本年度の調査では全体で44%と報告している(1)。また、ある新聞の記事では、京都障害児放課後・休日実態調査委員会の調査の報告として、学童保育の利用年齢の延長や1小学校区に1つの学童保育施設を整備する必要があることを訴えている(2)。

本研究は「子どもの生活実態調査」(二年次)として、昨年度の「平日」の調査に引き続いて、特に、土曜日・日曜日の「休日」の生活に焦点をあて、取り組んだものである。

土曜日・日曜日を「午前」「午後」「夜」の合計6つの時間帯に分け、子どもたちがそれぞれの時間帯に主にしていたこと、その活動への自発性や満足感を報告するとともに、様々な活動に対しての子どもたちの気持ちや意識の違いなどを報告する。

子どもたちが将来に亘って「自ら高め、よりよい生活を創り出す」(3)主体者となっていけるよう、その支援の参考資料となれば幸いである。

第1章 研究の概要

第1節 子どもの生活の現状

(1) 昨年度の調査研究から

子どもたちのよりよき成長を願う者にとって、とりわけ、家庭・地域社会・学校がそれぞれにかかわりの深い子どもたちの生活や意識について共通認識することは、互いの子どもへのかかわりの違いや立場を越えて必要であり、また重要なことでもある。

変化の激しい社会にあって、本市の子どもたちの現状を客観的に把握するために、昨年度「小・中学生の生活実態基本調査」(4)を実施した。この

昨年度の調査では、学校に通う日の生活とそこにみられる子どもの意識を調査・分析したのであるが、その結果から、

- ① 就寝時刻と生活習慣との関連において、就寝時刻の遅い子どもほど、朝の気分がスッキリしなかったり、朝食を摂ることに対する欲求が弱い傾向がみられたりしたこと
 - ② 家庭における家の人との会話の様子から、多くの子どもが良好な親子関係を築いている様子が見えるが、「自分も家の人も、ほとんど話さない」と回答した子どもが、各学年に5%程度いたこと
 - ③ 家庭学習の時間を「ほとんどしない」と回答した子どもは小学生では10%であるが、中学生では40%にのぼったこと
 - ④ 学校生活が楽しいと回答した子どもは、家庭での朝の気分が良好であったこと
 - ⑤ 子ども自身が人のかかわりの中で「社会に対する意識」も含めて、自己への意識を高めていくことが必要であること
- などを明らかにした。

つまり、子どもの生活では、家庭生活と学校生活が深く関連していること、また、充実した家庭生活を過ごしている子どもとそうではない子どもがいることが指摘できる。

このことから、子どもの生活実態を正しく把握するためには、さらに深めて土曜日・日曜日の調査をすることが必要であることを痛感した。

学校完全週5日制の実施から3年が経過しようとしている今、子どもたちの在りのままの土曜日・日曜日の生活の様子を客観的に把握することは、今後の学校教育の充実のためには勿論のこと、家庭や地域社会にとっても子どもたちのよりよき成長のためにも、是非とも必要なことである。

長期休業期間を除く、年間を通して学校に通っている期間にある80日間の土曜日・日曜日の子どもの生活の現状を把握することは、それぞれの子どもたちの毎日の生活が豊かで充実した日々となるよう、ひいてはそのことが毎日の学校生活の充実や将来の子ども自身の豊かな生き方につながるようになるのではないかと考える。

(2) 各種先行調査研究から

学校週5日制への移行の経過は、平成4年9月から月1回の、平成7年4月から月2回の実施と段階的に進められ、平成14年4月より完全実施となった。この移行途上に、中央教育審議会第一次答申(平成8年7月)は、「完全学校週5日制の実施

に当たって特に留意すべき事項」(5)として、次の3つのことを挙げている。

①「学校外活動の充実と家庭や地域社会の教育力の充実」として、土曜日や日曜日における活動の場や機会の提供、②「過度の受験競争の緩和と子供の[ゆとり]の確保」として、家庭や地域社会での豊富な生活体験・社会体験・自然体験の機会を与えようとするものである、③「完全学校週5日制の実施方法」として、国公私立の各学校種を通じて異なるものではない。

この学校完全週5日制へ移行する、およそ10年ほどの間に実施された数多くの調査研究の中から、3つの研究報告を取り上げ、その時々において、休日の子どもの生活がどのようにとらえられてきたのかをみていきたい。

まず、1つめは学校週5日制が実施された時期の調査報告から、京都市立永松記念教育センター(現、総合教育センター)の「小・中学生の土曜、日曜の過ごし方」(平成5年3月発行)(6)をみる。

この調査は、京都市教育研究所が昭和57年に行った「小・中学生の土曜・日曜の行動時間に関する調査」から約10年が経過し、その間の社会状況の変化に伴う子どもの生活の変化をとらえることなどを趣旨として実施された。調査対象日は平成4年9月下旬から10月上旬の土曜・日曜とし、できる限り土曜・日曜が雨天でない日(ただし、学校週5日制による休業土曜日を除く)としている。

調査対象の小学4年生から中学3年生までの土曜、日曜の行動時間のデータの分析結果から、「調査のまとめ」として①10年前と比べて、家の中で長い時間を過ごしていること、②小学生の屋外遊びが減少し「まんが・雑誌」や「テープ・CD」などで過ごす小学生の人数が中学生のそれに近づいたこと、③一つのことに集中して時間を使うのではなく、「家の中での選択肢の豊富さ」に加え、いくつかの活動をこなしていく状態である、と指摘している。

2つめは、中央教育審議会答申が出されたころの調査報告から、文部省委嘱調査の「幼児・児童・生徒の学校外活動実態調査報告書」(平成10年3月発行)(7)である。

この調査は、休業土曜日における子どもたちの生活や活動の実態及び保護者の意識を把握することにより、今後の学校外活動の充実を図るための資料を得ることを目的として実施された。調査期日は平成9年9月13日(第2土曜日)および9月27日(第4土曜日)とし、調査対象は学校種別ごとに層別二段抽出により調査対象校を抽出し、幼稚園

園5歳児、小学校2年生、同5年生、中学校2年生、高等学校2年生、盲・聾・養護学校児童生徒及びその保護者である。

この調査の質問紙は、①土曜日を午前と午後の時間帯に分け、何をして過ごしたかについて、26項目の選択肢の中から主な活動を3つ以内、②時間帯ごとに充足度を「とても充実していた」から「まったく充実していなかった」までの5段階の選択肢で、③休業土曜日が増えた場合に希望する活動内容を28項目の選択肢の中から主な活動を3つ以内で、回答を求めたものである。

「調査結果と考察」では、①午前の過ごし方では、指定都市の子どもと指定都市以外の子どもとの間では、指定都市以外の中学校2年生において「学校の部活動」(30.7%)と回答した者が多くみられた以外は大きな差がみられないこと、②充足度と過ごした相手との関連では、「自分一人で」過ごした場合に充足度が最も低いこと、③休業土曜日の午後実際にいった活動と希望する活動の比較では、小学校5年生の場合、幼稚園児や小学校2年生に比較して、「実際にいった活動」や「希望する活動」の種類が多くなっていること、中学校2年生では「ゆっくり眠る」という活動項目を「希望」する割合が「実際に実施」した割合を大きく上回っていることなどが指摘されている。

3つめに取り上げるのは、学校週5日制が完全実施されてからの調査報告で、東京都教職員研修センターの「学校週5日制実施における児童・生徒、家庭、地域の状況に関する調査研究」(平成16年3月発行)(8)である。

この調査は、学校週5日制完全実施が3年目を迎えるにあたり、児童・生徒及び保護者・家庭への調査を実施して、今後の学校の在り方や指導の方向性を提示することをねらいとして実施された。調査時期は平成15年11月1日から30日で、調査対象は、小学校5・6年の児童、中学校1・2年生徒、高等学校1・2年の生徒、ろう学校及び養護学校高等部の1・2年の生徒である。

「抄録」に記載されている調査の結果を略記すれば、①自宅での学習時間が総体として減少してきていること、起床時刻や就寝時刻などは、平日と休日とが一体的・連続的な関係にあること、②休日の過ごし方として、中学校における部活動のように、参加しているものとそうではないものとに分かれる傾向がみられること、休日(自由な時間)を計画的・主体的に使う力の有無が、休日の過ごし方を豊かにする原動力になること、③休日を計画的・主体的に使う力は、日頃の学校での過ごし

し方、とりわけ考え続ける力の育成や体験的な活動などと結びついていることなどが指摘された。

以上3つの調査研究をみてくると、特に休日の子どもの生活を具体的に把握するためには、実際の活動の把握として、いつ・どこで・だれと・どのようなことをして過ごしているのかを、時間的にも細かくみていく必要がある。また、それぞれの実際の活動に対する子ども自身の気持ち、あるいは「もっとこうしたい」というような願いなどにも関連づけ、事実と気持ちのズレの有無をもとらえる必要がある。

さらに、人とのかかわりの中で生活しているのであるから、親や友だち、自己に対する意識の在り様と活動の関連の把握も重要な事柄として挙がってくる。

そこで本研究では、以上のことを踏まえて調査票を作成した。

第2節 調査研究の概要

(1) 調査の構造および設問の構成

本研究は、標題にもあるように昨年度の研究成果と課題を踏まえて行われるものである。

本研究のねらいと基本的な考え方は、次のとおりである。

《調査研究のねらい》

- ・ 子どもの休日における生活の実態を把握すること
 - ・ 実態の把握を通して、今後の学校の指導や家庭生活に対する支援の手掛りを提示すること
- 《基本的な考え方》
- ・ 今後継続的に調査していくことも視野に入れ、調査内容はできるだけ基本的な項目とすること
 - ・ 設問の選択肢は可能な限り量的あるいは頻度・程度などとし、客観的に把握できるように努めること
 - ・ 子どもの成長による変化を把握するため、調査対象を小学4年生、同6年生、中学2年生としたこと

《調査の構造と設問の構成》

調査を通して明らかにしたいことは、次の6点である。

- ① 午前・午後・夜の時間帯における具体的活動
- ② 活動に対する自発性や満足感などの気持ち
- ③ 休日の生活習慣
- ④ 休日に対する願いや振り返り
- ⑤ 親や友だち、自己に対する子どもの意識

表1-1 活動項目(質問紙の選択肢)

だいたい家ですること		だいたい家の外ですること	
1	勉強する	10	習い事に行く (学習塾以外)
2	本を読む (雑誌やマンガを除く)	11	学習塾に行く
3	雑誌やマンガを読む	12	学校の部活動に行く
4	電話で喋る・ メールをする	13	所属しているスポーツ クラブやチームの活動 に行く
5	のんびり休養する・ 寝ている	14	ひとりで外に出かける
6	テレビやビデオを見る ・音楽を聴く	15	家族と出かける
7	ゲームをする	16	友だちと出かける・ 外で遊ぶ
8	家族と過ごす		
9	友だちと家の中で遊 ぶ(ゲームも含む)		

⑥ 休日の生活と学校生活とのかかわり

前節で述べた各種先行研究の成果などを参考にするとともに、質問紙調査の利点を最大限に活かしながら、調査の全体を構想した。

次に、上述した①から⑥について、設定理由を述べていきたい。

① 午前・午後・夜の時間帯における具体的活動

活動の内容を分類する方法は、活動している場所や活動の内容による時間の違い、一緒に活動している人など、様々に考えることができる。質問紙では、子どもの思考にも合致するように、「だいたい家ですること」と「だいたい家の外ですること」と、大まかに二分し、上の表1-1に示すように16の項目とした。

これらの項目では、煩雑にならないようにしながら活動内容が具体的に特定できることや、「ひとりで」「家族と」「友だちと」のように、人とのかかわりが明確になることに留意した。

また、土曜日・日曜日をそれぞれ午前・午後・夜(質問紙には「夜」は、午後8時から寝るまでの時間とする但し書きを記述した)の3つの時間帯に分け、合計6つの時間帯ごとに「していた」主な活動が把握できるようにした。

なお、調査の実施は9月であるので、4月から7月までの土・日の活動が調査対象である。

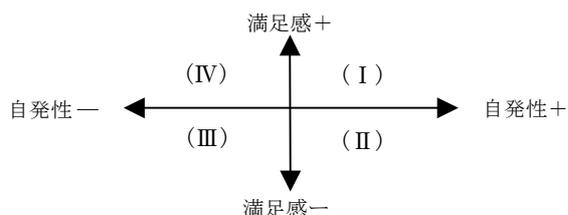
② 活動に対する自発性や満足感などの気持ち

人が何かの活動をするときは、無意識であった

り偶然であったりする場合もあるが、ここでは活動する前の気持ちを「自発性」としてとらえ、選択肢を「自分から、したかった」「自分から、少しぐらいはしたかった」「自分では、あまりしたくなかった」「自分では、まったくしたくなかった」の4つとした。休日の活動には「したい」と思って「する」活動もあるであろうし、「しなければならぬ」と考えて「している」活動もあるであろう。4つの選択肢を用意することで、それぞれの活動に対する事前の気持ちが把握できると考えた。

では、事後の気持ちはどのようなであろう。ここでは、それを「満足感」としてとらえ、選択肢を「やってよかった、楽しかった」「まあよかった、楽しかった」「あまりよくなかった、楽しくなかった」「まったくよくなかった、楽しくなかった」の4つとした。そして、この「自発性」と「満足感」を組み合わせると、次のⅠからⅣの象限を考えることができる。(図1-1)

図1-1 自発性と満足感の類型



つまり、Ⅰ.「自発性+・満足感+」、Ⅱ.「自発性+・満足感-」、Ⅲ.「自発性-・満足感-」、Ⅳ.「自発性-・満足感+」の4つである。もっとも、子どもの成長を考えると、常にⅠの状態がよいとは限らないことは、言うまでもない。

③ 休日の生活習慣

多岐にわたる事柄が考えられるが、土曜日と日曜日の両日、だれと昼食を摂っているかと日曜日の就寝時刻の2つの項目に絞った。

昼食については、きちんと摂っているのかいないのか、あるいは昼間の活動との関連から、だれと摂っているのかの内容とすることで、その子どもの休日の生活を特徴付けるのではないかと考えたからである。

日曜日の就寝時刻については、休日の終わりの気分や翌日(月曜日)からの学校への気持ちが反映されると考え、取り上げることにした。

④ 休日に対する願いや振り返り

「休日前の気持ち」と「休日後の気持ち」「休日に対する願い」とした。

「休日前の気持ち」として、休日への期待と過ごし方の計画性を取り上げた。休日の活動内容が明確で、その活動に自分の楽しみを見出している

のであれば、充実した休日を過ごしていると判断できると考えた。

「休日後の気持ち」は、休日全体の振り返りである。選択肢は、休日が「楽しく過ごせたので、学校に行くのが楽しみだ」「楽しく過ごせなかったので、学校に行くのが楽しみだ」「楽しく過ごせたので、学校に行きたくない」「楽しく過ごせなかったので、学校に行きたくない」として、学校への意欲とも関連づけた。また、「休日に対する願い」についても取り上げ、実際の活動や休日への期待などにも関連づけられるようにした。

⑤ 親や友だち、自己に対する子どもの意識

子どもの生活の実態を把握するためには、活動や行為の把握だけでは不十分である。そこで、昨年度の研究を踏まえ、設問や選択肢を昨年度の質問紙と同様にし、子どもの意識について構造化し、取り上げた。

i) 子どもの意識の対象

家庭生活とのかかわりから「親」(質問紙では「家の人」)、休日の活動の仲間として「友だち」、そして意識する主体としての「自己」とした。

昨年度の調査では、「先生」と「社会」も挙げていたが、休日の生活とのかかわりから「先生」を除外した。また、「社会」についての昨年度の調査結果では、「子どもたちが社会に対してどのようにかかわっていくのか、その意識がもてない」と考察したが、このたびの調査では、質問紙全体の構成から考え除外した。

ii) 子どもの意識の観点

人との関係を築こうとするとき、自己を表現・表出し相手(対象)を受け入れる。その受け入れや受け止めとしての「受容感」、この受容感の対概念として、自分は相手(対象)から、どのように受け入れられたり受け止められたりしているかとしての「被受容感」、相手(対象)に対してよりよい関係を築こうとするときのかかわりや行動としての「関与・行為」の3つとした。

昨年度の調査では対象に対して、こうあってほしいと思う事柄や内容としての「期待・願い」も含めていたが、「気持ち」に対する配慮や共感を求めたり、学年が進むにつれて公平性を求める意識へと変わっていくことから、このたびの調査からは除外した。

iii) 選択肢について

上述した対象と観点に対して、意識の程度を4段階の選択肢を設け、統一的に設定した。

子どもの意識についての観点と対象に対する具体的な設問は、表1-2に示したとおりである。

⑥ 休日の生活と学校生活との
かかわり

学校生活については「授業の理解の程度」「学校生活の楽しさ」「学級への関与」の3つの項目とした。

また、学校生活と休日の生活とのかかわりでは、学校での体験や経験を休日の生活に活かしているか、反対に休日の体験や経験を学校生活に活かしているかを、問うこととした。

以上①から⑥として述べてきたことを、図1-2「調査の構造」に示した。また、質問紙全体の設問項目については、表1-3「設問の構成一覧」として示している。

(2) 調査実施の概要

上述した調査の構造と設問の構成から、巻末に示した24問の調査問題を作成し、そのデータをもとに研究を進めた。

調査の概要は次のとおりである。

① 調査対象

小学校4年生、同6年生および中学校2年生

② 調査協力校および調査人数

京都市地域類型(9)に基づき類型ごとの比率に即して児童・生徒数を算出し、京都市立小学校14校、市立中学校10校に実施を依頼した。

③ 調査期間と方法

- ・平成16年9月6日～30日
- ・学級単位で一斉に実施

図1-2 調査の構造

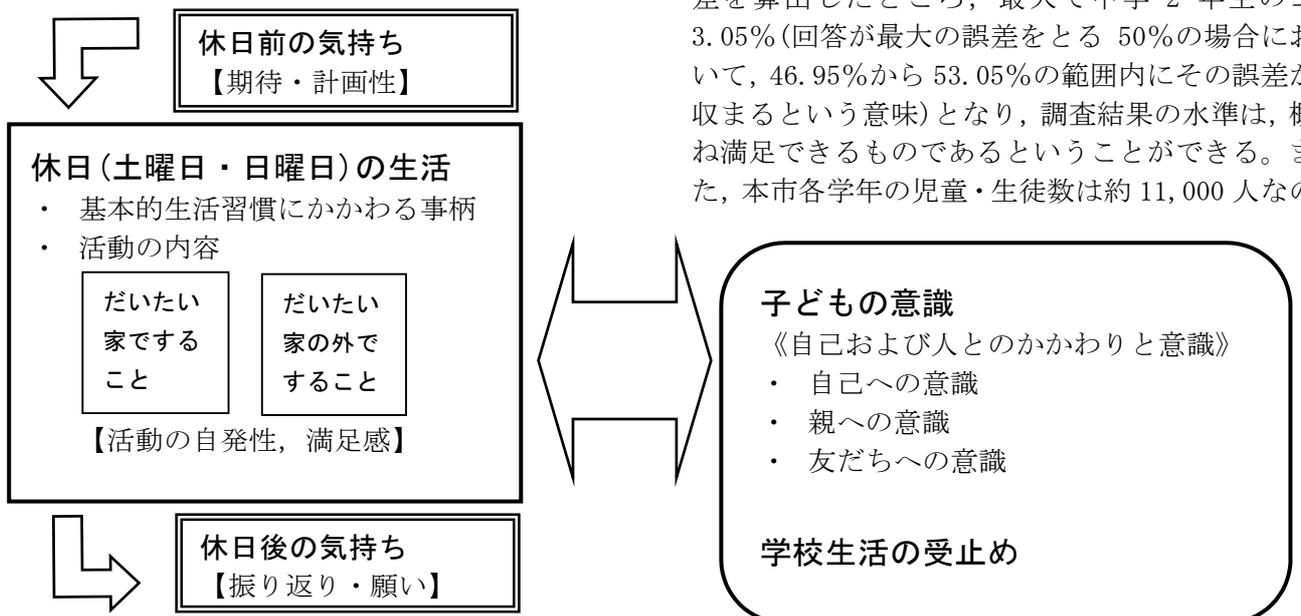


表1-2 子どもの意識 関係一覧

観点\対象	自 己	親(家の人)	友 だ ち
受 容 感	自分はやればできる力を持っていると思うか 【問16】	注意を素直に聞くことができるか 【問10】	周りの友だちは「いい友だちだ」と思うか 【問13】
被受容感	今の自分のことが好きか 【問17】	大事にされていると思うか 【問11】	信頼されていると思うか 【問14】
関与・行為	苦手なことの克服のために、努力しているか 【問18】	悪い事をしたと思ったとき、自分から謝るか 【問12】	友だちが困っているとき、自分から助けているか 【問15】

表1-3 設問の構成一覧

設問番号	設 問 項 目	設問番号	設 問 項 目
問 1	時間帯別の活動	問 13	友だち, 受容感
問 2	活動前の自発性	問 14	友だち, 被受容感
問 3	活動後の満足感	問 15	友だち, 関与・行為
問 4	昼食の様子	問 16	自己, 受容感
問 5	日曜日, 就寝時刻	問 17	自己, 被受容感
問 6	友だちとのかかわり	問 18	自己, 関与・行為
問 7	休日への期待	問 19	学級への関与
問 8	過ごし方の計画性	問 20	授業の理解度
問 9	休日の振り返り	問 21	学校生活の楽しさ
問 10	親, 受容感	問 22	学校の経験, 休日に活かす
問 11	親, 被受容感	問 23	休日の経験, 学校で活かす
問 12	親, 関与・行為	問 24	休日への願い

④ 有効回答者数・回答割合および標本誤差

地域類型ごとの、有効回答者数および回答割合は、次ページ表1-4のとおりである。そこで、さらに調査精度をみるために、標本調査で用いられる数式(10)によって、信頼度を95%として標本誤差を算出したところ、最大で中学2年生の±3.05%(回答が最大の誤差をとる50%の場合において、46.95%から53.05%の範囲内にその誤差が収まるという意味)となり、調査結果の水準は、概ね満足できるものであるということができた。また、本市各学年の児童・生徒数は約11,000人なの

で、本調査の1%は110人として換算することができる。

表1-4 有効回答者数・回答割合一覧

		児童・生徒数比率	有効回答者数	回答割合
小学4年生	地域Ⅰ類	0.7	6	0.5
	地域Ⅱ類	64.2	687	59.4
	地域Ⅲ類	15.1	207	17.9
	地域Ⅳ類	20.0	257	22.2
	合計	100.0	1157	100.0
小学6年生	地域Ⅰ類	0.7	6	0.5
	地域Ⅱ類	64.6	706	61.5
	地域Ⅲ類	14.6	174	15.2
	地域Ⅳ類	19.8	261	22.8
	合計	100.0	1147	100.0
中学2年生	地域Ⅰ類	0.2	4	0.4
	地域Ⅱ類	62.5	624	60.6
	地域Ⅲ類	14.3	139	13.5
	地域Ⅳ類	23.0	263	25.5
	合計	100.0	1030	100.0

- (1) 読売新聞 2004年10月5日(火)朝刊
「府教委 学校5日制調査」
- (2) 毎日新聞 2004年6月11日(金)朝刊
「04年参院選岐路」
- (3) 文部省「第1部 今後における教育の在り方」
『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について』
第1437号 ぎょうせい 1996 p.23
- (4) 拙稿「平成15年度研究紀要 報告490」『小・中学生
の生活実態基本調査』京都市総合教育センター 2004
- (5) 前掲 注(3) p.66
- (6) 「第1部 調査 小・中学生の土曜、日曜の過ごし方」
『主体性を育てる指導の試み』
京都市立永松記念教育センター 報告 371 1993
- (7) 「幼児・児童・生徒の学校外活動実態調査報告書」
青少年教育活動研究会 1998
- (8) 「学校週5日制における児童・生徒、家庭、地域の状
況に関する調査研究」
東京都教職員研修センター紀要 第3号 2004
- (9) 京都市地域類型：京都市の対象地域についてある一定
の標識(基準・めじるし)や、地域特性に基づいて比較
的同じような条件にある学校を単位地区(小学校通学
区域等)としてまとめ類型化したもので、層化抽出によ
る標本調査のために基礎資料となるもの。
参考：『京都市における地域類型』－教育調査の
ために－ 京都市教育研究所 報告 272 1981
- (10) 岩永雅也 他2名 『社会調査の基礎』
放送大学教育振興会 2001 p.74
標本誤差(E)の算出は次式による。

$$E = |P - p| = 1.96 \sqrt{\frac{P(100-P)}{n}}$$

P：母集団の統計値(%) p：標本の統計値(%) n：標本の規模

第2章 子どもの休日の暮らしの実態

第1節 休日の活動の実態

(1) 休日の活動の概要

8ページの図2-1には土曜日の、9ページの図2-2には日曜日の、午前・午後・夜、それぞれの時間帯における1「勉強する」から16「友だちと出かける、外で遊ぶ」の活動の、回答人数の割合を学年別に示している。

8ページ表2-1と9ページ表2-2では、図2-1、2-2で示した活動ごとに、活動に対する自発性として、設問2の選択肢のうち「自分から、したかった」「自分から、少しぐらいはしたかった」を自発+(プラス)として、活動後の満足感として、設問3の選択肢のうち「やってよかった、楽しかった」「まあよかった、楽しかった」を満足+(プラス)として、活動ごとの回答者数とともに、それぞれの割合を一覧で示した。

具体的には、図2-1の土曜日・午前に「勉強する」と回答した小学4年生は、学年全回答者1157人のうち244人で、それは21.1%にあたること、表2-1では、この244人のうち74.6%は「自分からしようとして」、76.2%は「してよかった」と回答していることを表している。

これらのグラフと表からはいろいろなことを読み取ることができるが、1から16の活動ごとに、順に概略を述べる。

1「勉強する」

小学生と中学生とでは、勉強している時間帯と人数に大きな違いがある。小学4年生では土曜日・日曜日の午前に、小学6年生では土曜日・日曜日の午前と夜に、多くの子どもたちが回答している。一方、中学生では日曜日の夜の90人(8.7%)が最も多い。このことは他の活動との関連もあるので、直ちに「中学生は休日に勉強していない」と結論付けることはできないが、中学生は小学生に比べ、休日に勉強している子どもが少ないことを示している。

自発性や満足感の数値から考えると、「午前」に勉強している子どもは「夜」勉強している子どもに比べて、自発性や満足感が高い傾向を読み取ることができる。「夜」の数値を見ると、いずれの学年でも「勉強している」子どもの1/3は「自分では、したくなかった」り、「楽しくなかった」と回答している。

このことは、自発性の面から見ると、「しなければならない」と思って勉強していたり、勉強した

けれども「やってよかった」と自覚することができなかつたりしていることを示している。

2「本を読む」

回答人数は、中学生よりも小学生が、小学6年生よりも4年生の方が多い。時間帯では、夜が多い。また、自発性や満足感では、多くの子どもが自分から読み、「読んでよかった」と思っている。

このことは、読書する楽しみを知っている子どもが、本を読んでいるのではないかと解釈できる。

3「雑誌やマンガを読む」

時間帯で言えば、どちらかといえば「夜」に多くなっている。多くの子どもが自分から読み、「読んでよかった」と思っているが、小学4年生では土曜日・日曜日の午後の満足感が85%程度と、他の時間帯に比べ少し低くなる。休日の午後では、自分から読みたくて「読んだ」が、読んで「よかった」と思えなかった子どもが若干いる。

4「電話で喋る、メールをする」

回答の想定は、中学生が夜していることとして考えた。予想どおり回答人数は昼間よりも夜で多く、中学2年生では土曜日・日曜日の夜、約130人(13%)が回答している。しかし、小学生でも、夜に4年生で10人、6年生で30人が、主にしていて回答している。自発性や満足感の数值は、小学6年生や中学2年生では夜の時間帯ではほぼ100%となっていることから、電話やメールの相手との親密性がうかがえるが、これが主な活動としていることは気がかりなことである。

5「休養する、寝ている」

時間帯別にみると、いずれの学年でも土曜日・午前よりも日曜日・午前の方が多い(小4; 11.2%→13.6%, 小6; 18.2%→22.2%, 中2; 24.4%→35.1%)。土曜日・日曜日、午後の回答者の割合は、小学生では2・3%であるが、中学生では7・8%となっている。また、夜の回答者の割合は、小学4年生では12.5%前後と土曜日、日曜日とも大差ないが、中学2年生では土曜日の7.1%に対して日曜日の9.4%となり、土曜日の夜では日曜日の夜に比べて、「休養する、寝ている」よりも他の活動をしている子どもが多いことを示している。小学6年生では、中学2年生の傾向を示している。

満足感の数值では、小学4年生では土曜日・午前では80.0%、日曜日・午前では82.8%と、どちらかといえば中学生よりも小学生の方が、休養したり寝ていたりした後、「よくなかった、楽しくなかった」と回答している傾向がうかがえる。

6「テレビやビデオを見る、音楽をきく」

いずれの学年でも土曜日・日曜日の夜と回答し

た子どもたちが圧倒的に多い。どの時間帯でも、自発性や満足感の数值も高い。

7「ゲームをする」

時間帯別に人数の割合を見ると、中学生では土曜日の夜に午後よりも多くなっているが(0.5%増)、全体としては、午前や夜よりも午後に多くなっている。学年別では小学4年生で多い。また、いずれの学年でも自発性や満足感の数值も高い。

8「家族と過ごす」

中学生よりも小学生で、また、時間帯では夜に家族と過ごしている割合が高く、この夜における自発性や満足感の数值を見ても93%以上と高い。このことは、多くの子どもたちが、家族との団欒を過ごしていることをうかがわせる。

9「友達と家の中で遊ぶ」

いずれの学年でも午後に多く、自発性や満足感でも高い数值を示している。ただ、土曜日の夜や日曜日の夜の回答人数が1~5人いること、この子どもたちの自発性や満足感が高いことなどは、留意しておく必要があると考える。

ところで、夜、友だちの家で過ごすことについてはケース・バイ・ケースで考えることが必要であるが、なぜ友だちの家で過ごしているのかを、家庭環境や家での人間関係、友だち関係などから把握しておく必要があるのではないだろうか。

10「習い事に行く(学習塾以外)」

各学年の回答人数の多い時間帯は、いずれも土曜日・午後で、小学4年生では153人(13.2%)、小学6年生では97人(8.5%)、中学2年生では45人(4.4%)となっている。自発性と満足感の数值からは、中学2年生、日曜日・夜を除いて、満足感の数值が自発性の数值を上回っている。つまり、習い事では自分では「気が進まない」場合もあるが、その後では、「やってよかった、楽しかった」と自覚できる子どもが増えていることを示している。

11「学習塾に行く」

各学年の回答人数の多い時間帯は、小学4年生では、土曜日・午後59人(5.1%)、小学6年生では、同じく土曜日・午後119人(10.4%)、中学2年生では、土曜日・夜106人(10.3%)となっている。この中学2年生の人数は、前述した同じ時間に家で「勉強する」子ども53人の2倍となっている。また、この土曜日・夜の中学2年生106人の自発性と満足感の数值をみると、それぞれ48.1%、60.4%と、他の時間帯や小学生に比べると、低い数值となっている(小学生では、4年生、日曜日・午前を除き80%以上)。

図 2-1 土曜日の時間帯別学年別活動一覧

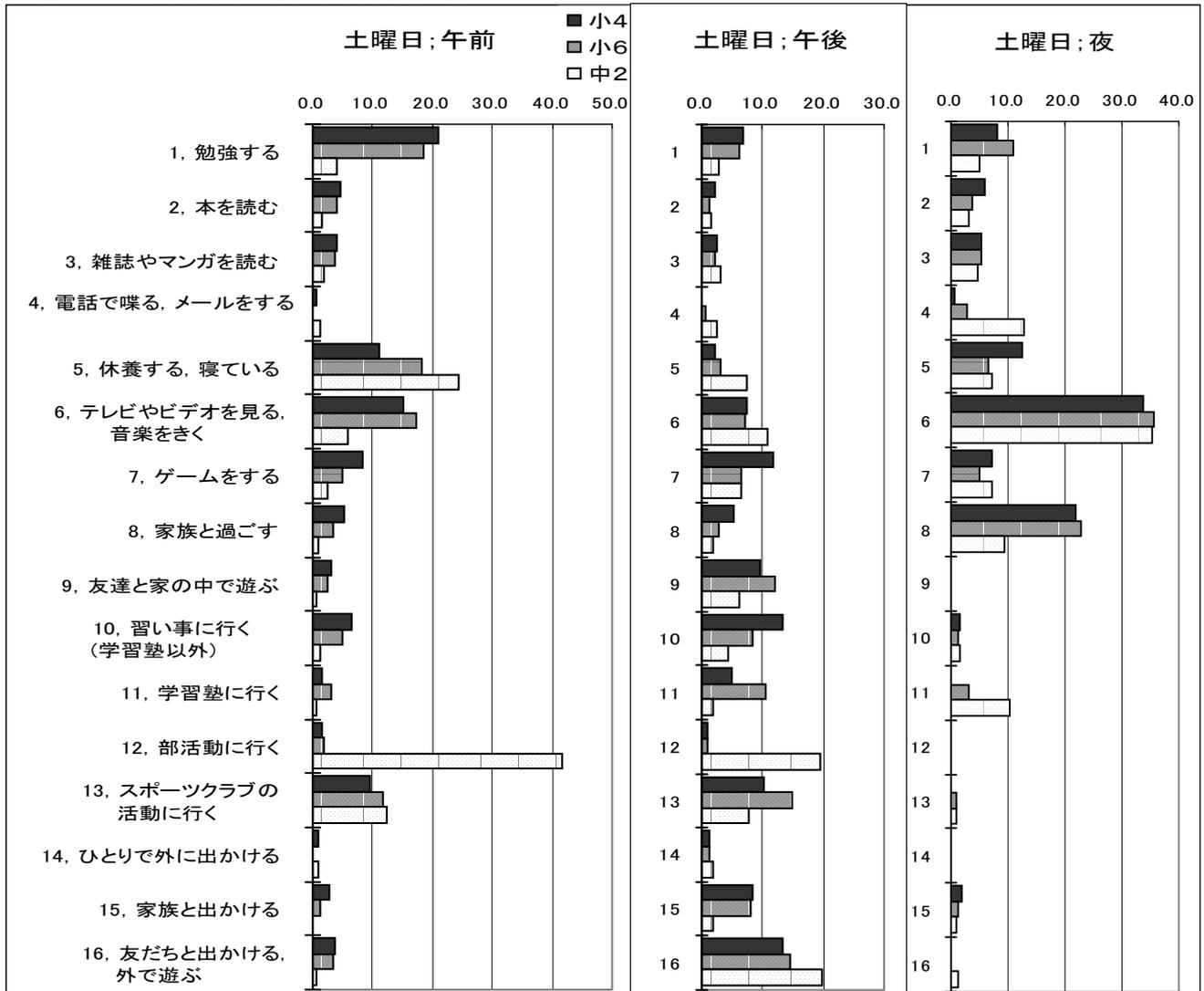


表 2-1 土曜日の活動別自発性+と満足感+のそれぞれの活動人数に対する割合

時間帯 学年 人数	土・午前						土・午後						土・夜					
	小4		小6		中2		小4		小6		中2		小4		小6		中2	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
1 勉強する	244	74.6	212	76.2	40	72.5	79	72.2	71	81.7	29	62.1	93	64.5	124	75.0	53	69.8
2 本を読む	52	96.2	47	95.7	16	100.0	24	95.8	15	100.0	17	100.0	67	94.0	42	97.6	33	100.0
3 雑誌やマンガを読む	46	97.8	42	92.9	20	95.0	28	92.9	26	100.0	31	100.0	63	93.7	60	96.7	48	97.9
4 電話で喋る, メールをする	7	100.0	5	100.0	13	92.3	3	66.7	7	100.0	24	95.8	7	71.4	32	100.0	131	99.2
5 休養する, 寝ている	130	93.1	209	97.1	251	96.4	25	96.0	36	97.2	77	93.5	143	83.9	77	84.4	73	89.0
6 テレビやビデオを見る, 音楽をきく	176	96.0	198	98.5	59	100.0	86	95.3	82	93.9	113	99.1	391	95.4	408	98.0	363	97.0
7 ゲームをする	95	92.6	58	94.8	24	100.0	135	94.1	73	98.6	68	98.5	84	97.6	57	98.2	73	94.5
8 家族と過ごす	62	87.1	40	90.0	9	77.8	61	95.1	31	96.8	19	94.7	254	93.7	260	96.5	98	92.9
9 友達と家の中で遊ぶ	35	100.0	30	100.0	7	100.0	110	97.3	137	98.5	64	100.0	5	100.0	2	100.0	4	100.0
10 習い事に行く (学習塾以外)	76	90.8	58	93.1	12	91.7	153	83.0	97	93.8	45	84.4	17	82.4	14	92.9	16	81.3
11 学習塾に行く	17	88.2	34	82.4	5	80.0	59	83.1	119	83.2	18	61.1	3	100.0	37	78.4	106	60.4
12 部活動に行く	18	94.4	21	100.0	429	87.9	10	80.0	11	72.7	201	85.6	1	100.0	0	0.0	0	0.0
13 スポーツクラブの活動に行く	112	93.8	136	97.1	126	90.5	118	93.2	170	95.9	81	95.1	1	100.0	11	81.8	10	100.0
14 ひとりで外に出かける	10	80.0	4	100.0	8	87.5	15	93.3	14	100.0	20	85.0	5	80.0	3	100.0	1	100.0
15 家族と出かける	33	93.9	13	100.0	4	75.0	97	93.8	93	92.5	18	94.4	22	95.5	16	93.8	9	88.9
16 友だちと出かける, 外で遊ぶ	44	95.5	40	97.5	7	100.0	154	96.8	165	95.8	205	99.0	1	100.0	4	100.0	12	100.0

図 2-2 日曜日の時間帯別学年別活動一覧

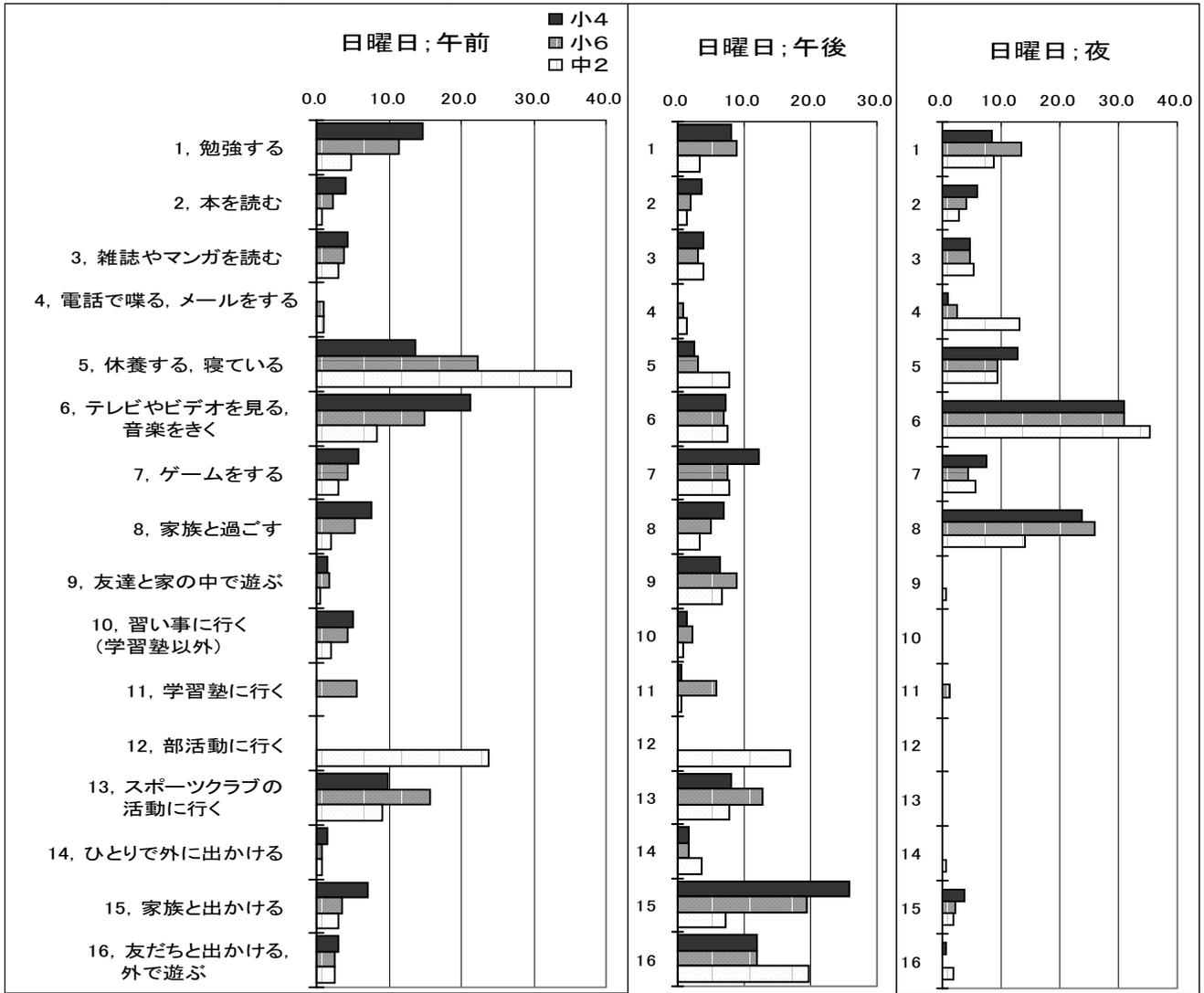


表 2-2 日曜日の活動別自発性+と満足感+のそれぞれの活動人数に対する割合

時間帯 学年 人数	日・午前			日・午後			日・夜		
	小4 人数	小6 人数	中2 人数	小4 人数	小6 人数	中2 人数	小4 人数	小6 人数	中2 人数
1 勉強する	171	131	50	92	101	33	98	155	90
2 本を読む	46	27	7	41	21	15	70	46	29
3 雑誌やマンガを読む	49	44	30	44	36	41	55	55	54
4 電話で喋る, メールをする	4	12	10	2	8	14	10	27	136
5 休養する, 寝ている	157	255	362	28	34	79	147	108	97
6 テレビやビデオを見る, 音楽をきく	245	171	85	82	81	77	358	356	364
7 ゲームをする	67	49	32	140	85	80	85	51	58
8 家族と過ごす	87	62	22	80	58	34	275	296	144
9 友達と家の中で遊ぶ	18	19	4	75	102	70	4	1	5
10 習い事に行く (学習塾以外)	58	50	21	17	25	10	2	5	4
11 学習塾に行く	3	65	3	6	68	7	0	14	1
12 部活動に行く	2	3	246	3	1	174	0	0	0
13 スポーツクラブの活動に行く	114	179	93	93	146	81	0	1	4
14 ひとりで外に出かける	19	10	9	18	20	38	3	4	7
15 家族と出かける, 外で遊ぶ	83	41	31	298	224	73	44	26	18
16 友だちと出かける, 外で遊ぶ	34	29	25	138	137	204	6	2	19

つまり、中学2年生では休日の勉強が、土曜日・夜の学習塾だけになっている子どもがいるのではないかと、また、自発的な気持ちで行っていない子どもや、塾を終えても「やってよかった」と自覚できない子どもが多数いるのではないかと考えられる。

小学6年生では、予測されたことではあるが、日曜日・午前に65人、午後に68人、夜に14人と、日曜日にも多くの子どもが塾に通っている。この傾向は、他の学年には見られないことである。つまり、中学受験をめざして学習塾に行っていることをうかがわせる。

12「部活動に行く」

小学生の回答もあるが、回答の想定は、中学生としていたので、ここでは中学生の回答に絞ることとする。

回答人数を見ると、土曜日・午前429人(41.7%)から日曜日・午後174人(16.7%)と、多くの子どもが部活動に参加している。また、自発性や満足感の数値からも、85%以上と高い数値がでていることは、多くの子どもが自分から参加し、そこでの活動に満足していることを示している。

13「スポーツクラブの活動に行く」

上述の「部活動」は、中学生の回答を念頭においていたのであるが、この「スポーツクラブ」は、小学生では、中学生の「部活動」に匹敵することとして考えた。

各学年の回答人数の多い時間帯は、小学4年生では、土曜日・午後118人(10.2%)、小学6年生では、日曜日・午前179人(15.6%)、中学2年生では、土曜日・午前126人(12.2%)となっている。大まかに言えば、休日の昼間、小学4年生や中学2年生では、それぞれの学年の1割前後が、小学6年生では1割以上が、スポーツクラブの活動をしている。

これらの子どもたちの自発性や満足感の数値のうち、一番低いものは中学2年生、土曜日・午前の満足感の値89.7%であることからみると、この活動でも、多くの子どもが自分から参加し、そこでの活動に満足していることを示している。

また、人数は少ないが、土曜日や日曜日の夜に「スポーツクラブ」の活動をしている子どもたちがおり、この子どもたちの自発性や満足感も高い。

つまりスポーツクラブの活動では、自分から「しよう」と思って取り組み、活動後には「やってよかった、楽しかった」と思う子どもが多いと結論づけられる。

14「ひとりで外に出かける」

回答人数割合の最も多い学年と時間帯は、中学2年生の日曜日・午後である。その中学2年生の人数と割合は、38人の3.7%である。満足感の数値86.8%を見ると、人数が少ないので断定はできないが、日曜日・午前の小学4年生で73.7%、小学6年生で70.0%と比べると、小学生は中学生に比べ、ひとりで過ごすことに必ずしも満足しているとは言えないだろう。同時に、人数は極めて少ないのではあるが、土曜日や日曜日の夜に「ひとりで外に出かける」と回答した子どもがゼロではないこと、また、この子どもたちの自発性や満足感が高いことを指摘しておきたい。

15「家族と出かける」

各学年の回答人数の多い時間帯は、日曜日・午後で、人数とその割合は小学4年生では、298人(25.8%)、小学6年生では、224人(19.5%)、中学2年生では、73人(7.1%)となっている。

いずれの時間帯でも、いずれの学年でも土曜日より日曜日の方が多くなっていることは、日曜日の午後は子どもを含めて家族一緒に過ごせる時間となっている家庭が多いのではないかととらえられる。また、その日曜日・午後の自発性や満足感、いずれの学年でも最も高い。良好な家族との時間を過ごしていることがうかがえる。

16「友だちと出かける、外で遊ぶ」

各学年の回答人数の多い時間帯は、土曜日・午後で、人数とその割合は小学4年生では、154人(13.3%)、小学6年生では、165人(14.4%)、中学2年生では、205人(19.9%)となっている。また、自発性や満足感の数値からは、そのほとんどの子どもたちが自発的に、同時に、満足している様子がうかがえる。しかし、ここでも土曜日や日曜日の夜に、「友だちと出かける、外で遊ぶ」と回答した子どもがゼロではないことを指摘しておかなければならない。

学年別に土曜日・夜と日曜日・夜の人数を示すと、小学4年生1人→6人、小学6年生4人→2人、中学2年生12人→19人であり、この子どもたちの自発性や満足感も高い数値を示している。

教育の観点から見たとき、だれが、だれと、どこで、何をしているのかを十分に把握する必要がある。そして、家庭や地域と連携・協力して、子どもの生活が改善される方途を探っていかなければならないのではないかと考える。

以上、子どもたちの休日の生活を、土曜日の午前から日曜日の夜までを6つの時間帯に分け、時間帯ごとに、活動項目ごとの人数の割合や自発性や満足感の数値をみながら概観した。

《休日の活動の相関係数について》

相関係数(11)の読み取りについては、細心の注意を払わなければならないが、表2-3に、学年ごとの休日の活動にかかわって、次の3つの相関係数を挙げた。

まず、土曜日の時間帯と日曜日の時間帯の活動についての数値を上段に、2つめは、その時間帯ごとの活動の、自発性と満足感についての数値を、土曜日の場合を下段左に、日曜日の場合のそれを下段右に示した。

表2-3 休日の活動にかかわる相関係数一覧

日曜日	小 4			小 6			中 2		
	午 前	午 後	夜	午 前	午 後	夜	午 前	午 後	夜
土 曜 日	0.37			0.35			0.31		
	0.57	0.54		0.53	0.58		0.64	0.61	
日 曜 日		0.26			0.30			0.28	
		0.60	0.57		0.57	0.58		0.63	0.62
日 曜 日			0.36			0.42			0.39
			0.49	0.54		0.49	0.61		0.64

活動にかかわる数値からは、0.26から0.39と「ある程度の相関が認められる」の数値が、自発性と満足感の数値からは、0.49から0.64の「高い相関がある」の数値が算出された。

このことから、子どもによっては、土曜日の活動と同じことを日曜日にもしている場合が間々あること、また、特に中学2年生では、その活動の自発性と満足感の関連性の度合いも比較的高いことがわかる。

中学生ともなると休日の活動が固定化されやすく、したがって、活動の選択肢が狭まるのであるから、その狭い範囲の中で選び取るしかなく、自分が自ら選んだ活動なのだから、満足せざるを得ないと解釈するのは、穿った見方になるのであろうか。

この点については、本調査だけで結論を導くことはできない。今後の調査結果にその判断を譲りたい。

(2) 学年ごとの特徴的な活動の考察

ここでは、学年ごとに特徴的な活動についてみていくことにする。

それぞれの活動をしている子どもたちには、何か傾向といえるようなことがないのだろうか。あるいは、自発性や満足感に違いがあるのは、どのようなことが要因として考えられるのであろう。また、子どもの意識はどのようなものであろう。

そこで、次に活動項目を絞り、他の設問との関連をみていくことにする。

全体にかかわる考察の方法について説明する。《関連する設問の扱いについて》

必要に応じて、学年全体の回答結果を挙げることにした。なお、学年全体の考察については後述する。

《子どもの意識の分析方法》

前章で述べたとおり、子どもの意識にかかわる設問は、昨年度の設問を踏襲している。したがって、昨年度の結果と比較する上からも、分析の方法についても昨年度の方法に準じることとした。

方法は、「子どもの意識」にかかわる設問ごとに、その選択肢別に一定の点数を配点し得点化する方法である。具体的に説明すると、各設問の選択肢1から4に、順に+2点、+1点、-1点、-2点を与えた。本調査の子どもの意識にかかわる設問の選択肢は、全て4つなので選択肢の番号をそのまま点数化する方法もあるが、+2点から-2点を配点することで、0点を基準に、+の点数であれば設問に対する回答の意識は「肯定」として、-であれば「否定」の意識として判断することができると考えた。

《分析する対象学年、活動項目と活動時間帯一覧》

・小学4年生

活 動 項 目	分析対象とする時間帯
休養する・寝ている	日曜日・午後
ゲームをする	日曜日・午後
習い事に行く	土曜日・午後
家族と過ごす	日曜日・夜
ひとりで外に出かける	土曜日・日曜日の夜
友だちと外に出かける、外で遊ぶ	土曜日・日曜日の夜

・小学6年生

活 動 項 目	分析対象とする時間帯
休養する・寝ている	日曜日・午後
学習塾に行く	土曜日・午後
スポーツクラブの活動に行く	日曜日・午前
家族と過ごす	日曜日・夜
友だちと外に出かける、外で遊ぶ	土曜日・午後
ひとりで外に出かける	土曜日・日曜日の夜
友だちと外に出かける、外で遊ぶ	土曜日・日曜日の夜

・中学2年生

活 動 項 目	分析対象とする時間帯
休養する・寝ている	日曜日・午後
学習塾に行く	土曜日・夜

部活動に行く	土曜日・午前
友だちと外に出かける、 外で遊ぶ	土曜日・午後
ひとりで外に出かける	土曜日・日曜日の夜
友だちと外に出かける、 外で遊ぶ	土曜日・日曜日の夜

I 日曜日・午後に「休養する・寝ている」

3つの学年でこれを選んだ理由は、いずれの学年も該当する人数は少ないのであるが、多くの子どもたちが多様な活動している時間帯に、自分のしたいことがわからなかったり、何もしたくないなどの理由から、結果として「休養する・寝ている」と回答した子どもはいないのだろうかという疑問からである。

表2-4は、該当する子どもたちの日曜日・午前の活動の項目別人数をあげている。図2-3は、休日への期待として取り上げた《設問7：休みの日が来る前には、どのような気持ちになりますか》の回答結果を、次ページ図2-4は、休日の願いとして取り上げた《設問24：休日の生活で、もっとこうしたいと思うことはどのようなことですか》を、同じく次ページ図2-5は、設問16から18の自己への意識の観点の平均点の図を示した。これらの回答状況を読み取りながら考察する。

表2-4からは、中学2年生の「休養・寝る」の17人がいる。つまり、一日中「寝ている」のである。図2-3では、それぞれ学年全体に比べ「ひとりでやりたいことができるので、うれしい」の回答が上回っていること、中学2年生では、「学校で友だちと遊んだりできないので、うれしくない」や「することがなかったり、ダラダラ過ごしてしまうので、うれしくない」の回答が増えている。図2-4では、小学6年生で、「もっと家族と過ごしたい」が、学年全体より増えていること、また、小学生では「もっとやったことのないことをしてみたい」が増えていること、中学生では「もっとひとりでんびりしたい」が大きく増えている。図2-5では、自己への「被受容感」の設問《今の自分が好きか》で、小学4年生に比べ小学6年生と中学2年生で否定的な結果が表れていること、「関与・行為」の設問《苦手なことの克服のために、努力しているか》では、学年が進むにしたがって下がっている。

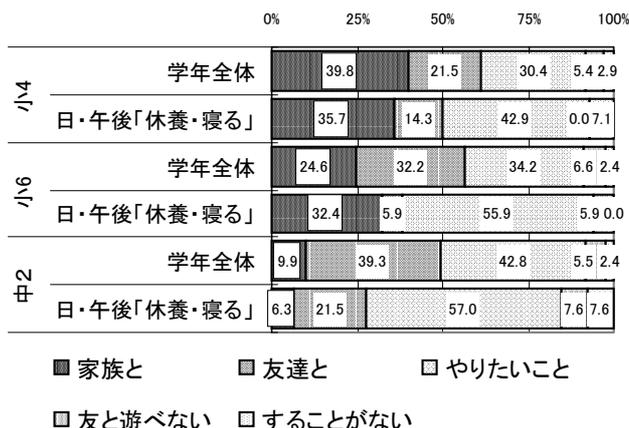
以上のことから、日曜日の午後「休養する・寝ている」と回答した子どもたちには、次のような傾向がうかがえる。

① 中学2年生では、日曜日の午前中も「休養し

表2-4 日・午後「休養・寝る」の日・午前の活動

活動項目	小4 (計28人)	小6 (計34人)	中2 (計79人)
勉強	8	6	3
読書	2	3	1
雑誌・マンガ		2	3
電話・メール			1
休養・寝る	1	2	17
テレビ・ビデオ・音楽	6	5	6
ゲーム	3	4	2
家族と	2	3	1
習い事	2	1	3
部活		3	28
スポーツクラブ	1	4	11
ひとり、外	2	1	
家族、外			1
友だち、外	1		2

図2-3 日・午後「休養・寝る」の休日への期待



ている・寝ている」子どもが、日曜日・午後に「休養する・寝ている」と回答した子どもの5人に1人ほどいるのではないか。

② 日曜日の午後「休養する・寝ている」子どもたちの土曜日や日曜日への「期待」や「願い」は、「ひとりで、やりたいことをやったり、のんびりしたい」という傾向があるのではないか。

③ 日曜日の午後「休養したり、寝ている」ので、学年が進むにしたがって、そんな自分が「好きではなかったり、自分から努力していない」と自分のことをとらえていくのではないか。

そこで、表2-4で示した、日曜日の午前・午後とも「休養・寝る」と回答した中学2年生17人を取り上げ、日曜日・午前には「休養・寝る」以外の活動をしていた62人と比較し、検討してみる。

図 2-4 日・午後「休養・寝る」の休日への願い

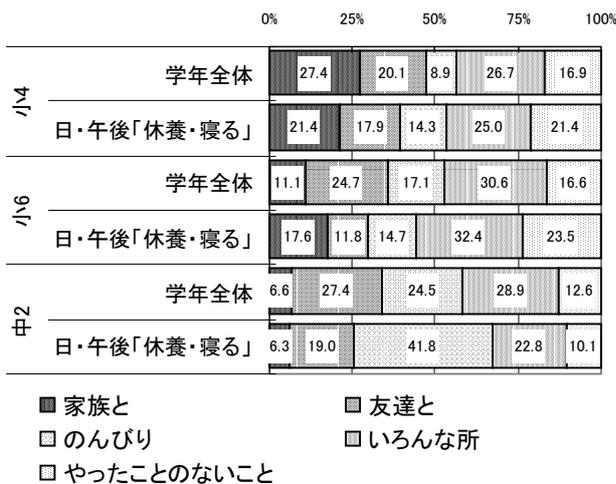


図 2-5 日・午後「休養・寝る」の自己への意識

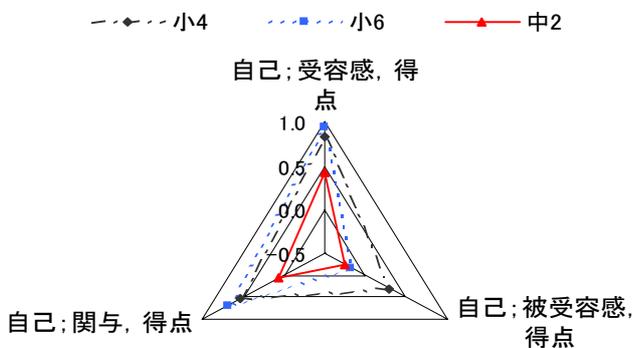


図 2-6・2-7 は、どちらも上段に日曜日・午後だけ「休養・寝る」の 63 人のデータを、下段に日曜日・午前と午後のどちらも「休養・寝る」と回答した 17 人のデータを、「期待」と「願い」の順でグラフに示した。図 2-8 は、それら 2 つのグループの「自己への意識」の平均点の図を示している。

図 2-6 から、午前・午後の方が、午後だけに比べて、休日の前「学校で友だちと遊んだり、することがなかったり、ダラダラ過ごしてしまうので、うれしくない」と回答している割合が増えている。図 2-7 から、午前・午後の方が、午後だけに比べて、休日への願いとして、「もっといろんなところへ行ってみよう、もっとやったことのないことをしてみよう」と回答している割合が増えている。ところが、人とのかかわりを示す「家族と過ごしたい」や「友だちと過ごしたい」は、減っている。実際は「休養したり、寝ている」のであるが、そのような日常とは違うことを求めているのかもしれない。図 2-8 から、午前・午後の方が、午後だけに比べて、自己への意識がより

図 2-6 中 2 ; 日曜日, 「休養・寝る」;

午後だけと午前・午後の「休日への期待」比較

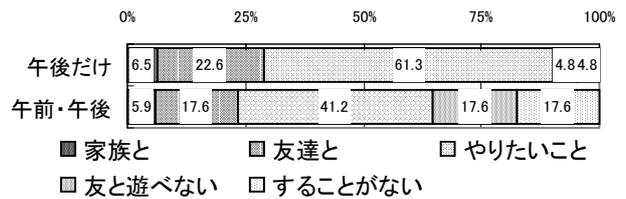


図 2-7 中 2 ; 日曜日, 「休養・寝る」;

午後だけと午前・午後の「休日への願い」比較

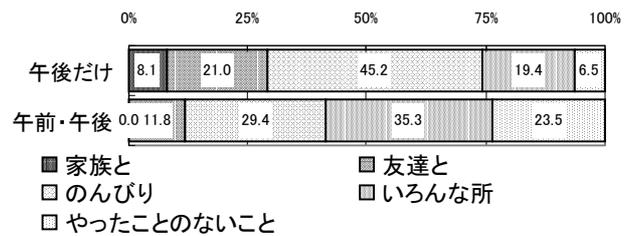
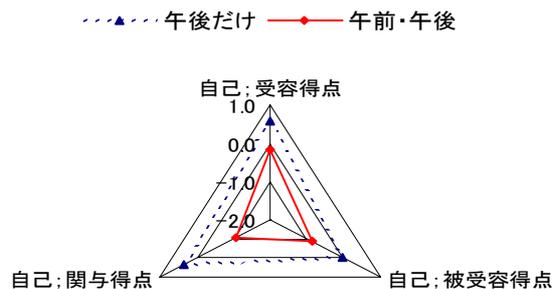


図 2-8 中 2 ; 日曜日, 「休養・寝る」;

午後だけと午前・午後の「自己への意識」比較



否定的な数値となって表れている。

これらの結果から、日曜日の午前も午後も「休養する・寝ている」と回答した中学 2 年生は、前述の①から③に加えて、次の傾向も浮かがる。

④ 休日に対する願いは、「いろいろなところへ行ってみよう、やったことのないことをしてみよう」などと願っているが、実際には「学校で友だちと遊べなかったり、自分ですることがないので、「休養」したり、「寝て」しまっている。そのような自己に対して、その意識も否定的になっている。

標本数が限られているので、分析結果の解釈には慎重でなければならないが、日曜日に「休養する・寝ている」と回答した子どもたちの傾向を見逃してはならないと感じる。

II 小学 4 年生, 日曜日・午後「ゲームをする」

一般に、多くの子どもたちが家の中でする遊びの 1 つとして認識されている。しかし、図 2-1・2-2 に示した結果をみると、他の 15 の選択肢に

図 2-9 小 4 ; 日・午後「ゲーム」の休日への期待

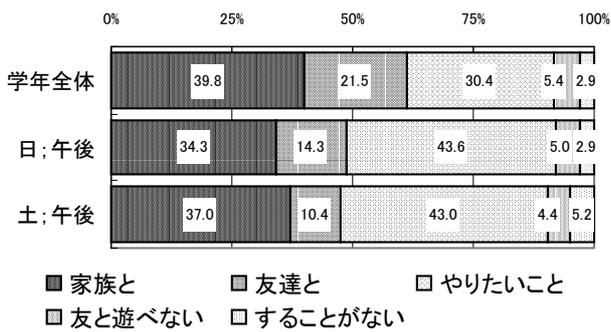


図 2-10 小 4 ; 日・午後「ゲーム」の友だちとのかかわり

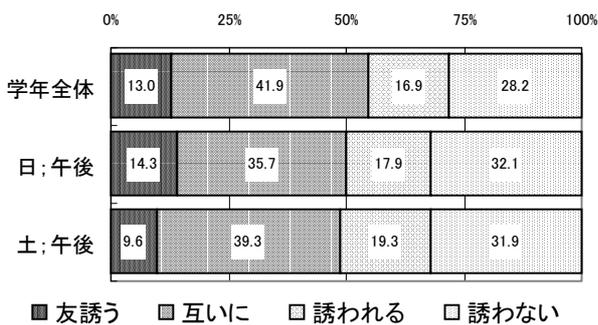
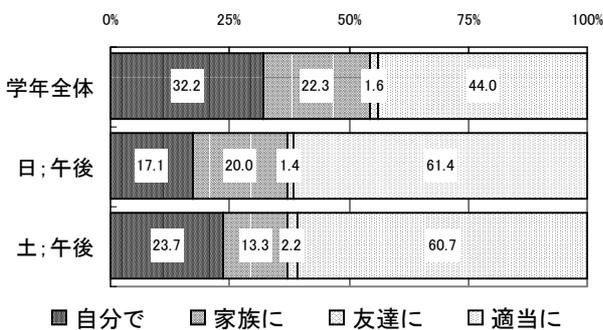


図 2-11 小 4 ; 日・午後「ゲーム」の過ごし方の計画性



挙げた活動に比べて、取り立てて多いというわけではないことがわかる。いずれの学年でも自発性や満足感の数値は高いが、常にその両方が 100% というわけでもない。

「ゲームをしている」子どもたちの傾向を、休日への期待や友だちとのかかわり、過ごし方の計画性の面から考察する。考察の対象とする子どもたちは、6つの時間帯の中で回答人数の多い小学4年生、日曜日・午後を取り上げることとした。

図 2-9 には、該当する子どもたちの、休日への期待として取り上げた《設問 7:休みの日が来る前には、どのような気持ちになりますか》の回答結果を、図 2-10 は、休日の過ごし方と友だちとのかかわりとして取り上げた《設問 6:休日に、友だちを誘って遊びますか》の回答結果を、図 2-

11 は、休日の過ごし方の計画性として取り上げた《設問 8:休日の過ごし方をどのように決めていますか》の回答結果を、学年全体の回答結果とともに、土曜日・午後「ゲーム」と回答した子どもたちのデータとも合わせて示した。

その理由は、小学4年生の土曜日・午後の活動と日曜日・午後の活動の相関係数は 0.26 であるので、この数値を「弱い相関がある」と解釈し、土曜日・午後「ゲーム」と回答した子どもたちのデータとも比べながら考察することで、日曜日・午後「ゲーム」と回答した子どもたちの傾向が、より明確になると考えた。

図 2-10 に示した「友だちとのかかわり」では、「自分から誘うことも、友だちから誘われることもない」が増えるが、学年全体と大差ないといえる。図 2-9 「休日への期待」では、「友だちと一緒に過ごせるので、うれしい」が減り、その分「ひとりでやりたいことができるので、うれしい」が増えている。図 2-11 「過ごし方の計画性」では、「その時になって、適当に決めている」が、大幅に増えている。

以上のことから、日曜日の午後「ゲームをする」と回答した小学4年生の子どもたちの傾向は、次のようにまとめることができる。

○ 友だちと一緒にゲームを楽しむというよりも、むしろ自分一人で、自分の都合のよい午後の時間に、ゲームを楽しんでいる。

なお、該当の子どもたち 140 人のうち、日曜日・午前にも「ゲームをする」と回答した子どもは 10 人であったことも付け加えておきたい。

Ⅲ 小学4年生、土曜日・午後「習い事に行く」

これを選んだ理由は、先に習い事では「自分では気が進まない場合もあるが、その後では、やってよかった、楽しかったと自覚でき子どもが増える」と概略したことにある。

習い事の具体的な内容によって、自発性や満足感に違いがあると考えられるが、ここでは習い事の内容を把握していないので、休日への期待と親や自己への子どもの意識の違いをみることにする。

分析の対象は、人数が少なくなるのであるが、自発性-(マイナス)26人のうち、満足感+(プラス)12人と満足感-(マイナス)14人を比較検討する。

人数が少ないので断定はできないが、図 2-12・2-13 の 2 つの結果から、土曜日の午後「習い事に行く」と回答した小学4年生の子どもたちのうち、自発性-の子どもとの満足感の違いは、次のようにまとめることができる。

図 2-12 小 4 ; 土・午後「習い事に行く」,
自発性-の満足+と満足-の期待, 比較

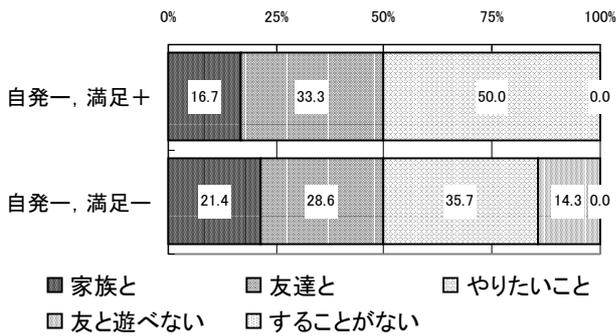
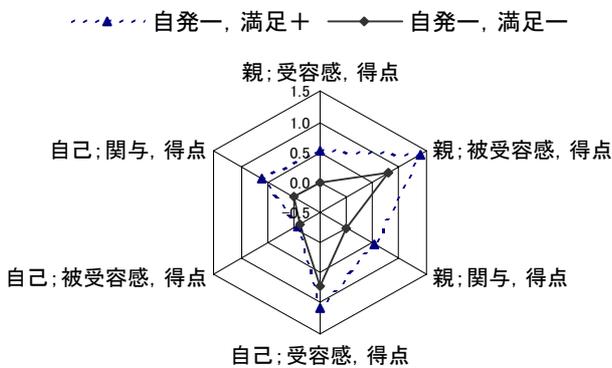


図 2-13 小 4 ; 土・午後「習い事に行く」,
自発性-の親と自己への意識, 比較



○ 親への意識や自己への意識の差から、「自分はやればできる」「苦手なことを克服するために、努力している」などの意識に違いがあるのではないだろうか。

「習い事」に通う切っ掛けは様々であろうが、家の人の勧めで始める場合もあるだろう。それを継続しながら、「上達している」などの実感を通して、自己への意識を高めているのではないかと考えられる。

IV 小学 6 年生, 土曜日・午後「学習塾に行く」

この項目を選んだ理由は、先に「中学受験をめざして学習塾に行っていることをうかがわせる」と述べた。小学 6 年生の活動の特徴のひとつとして取り上げる。

図 2-14 は休日への期待を、図 2-15 は過ごし方の計画性を、図 2-16 は自己への意識を、それぞれ該当する子どもたちと学年全体の回答結果を比較したグラフである。

これら 3 つのグラフから、土曜日の午後「学習塾に行く」と回答した小学 6 年生の子どもたちの傾向は、次のようにまとめることができる。

○ 「学習塾に行く」という明確なことをするので、休日の過ごし方は「自分で決める」度合いが高く、「やりたいことができるので、うれしい」

図 2-14 小 6 ; 土・午後「学習塾に行く」の
休日への期待, 学年全体との比較

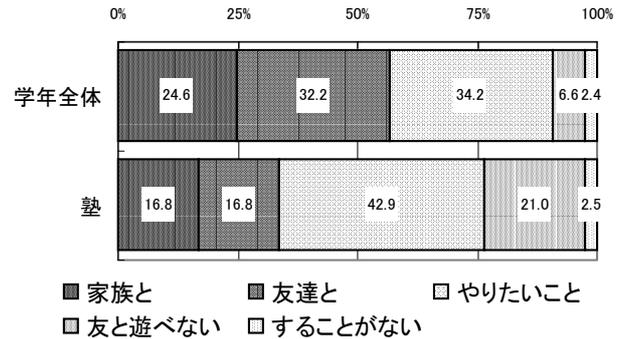


図 2-15 小 6 ; 土・午後「学習塾に行く」の
過ごし方の計画性, 学年全体との比較

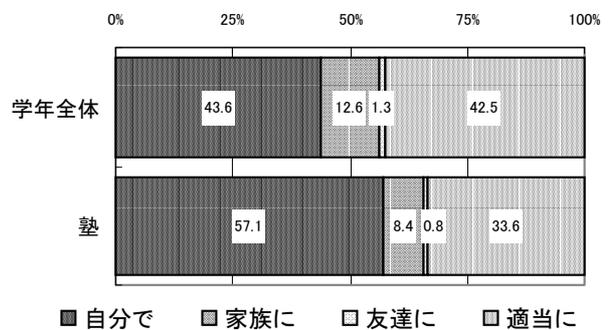
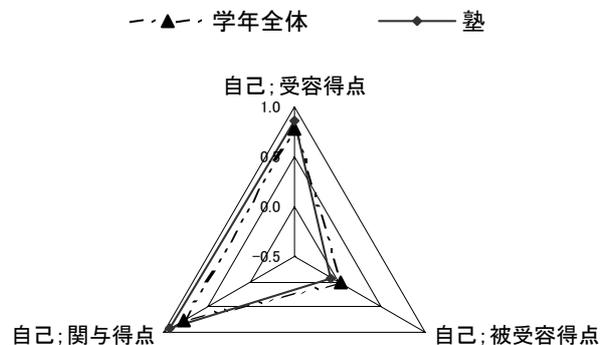


図 2-16 小 6 ; 土・午後「学習塾に行く」の
自己への意識, 学年全体との比較



と思う子どもが多いが、一方で、その分「友だちと遊べない」ので、休日前には「うれしくない」と思う子どもも 5 人に 1 人いる。また、自己への意識では、被受容感「自分のことが好きか」で少し下がるが、「やればできる力を持っている」の受容感や「苦手なことの克服のために、努力している」の関与・行為で少し上がっている。これらのことが自発性や満足感の要因になっているのではないかと考えられる。

V 小学 6 年生, 日曜日・午前「スポーツクラブの活動に行く」

図 2-17 小 6 ; 日・午前「スポーツクラブの活動に行く」の、休日への期待、学年全体との比

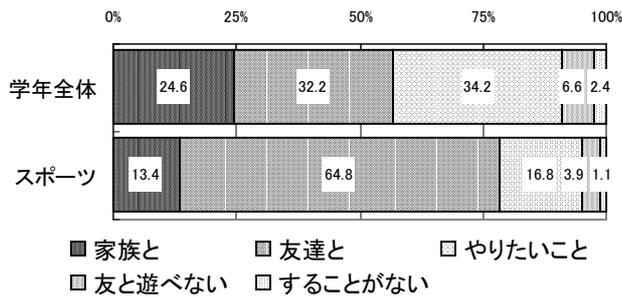
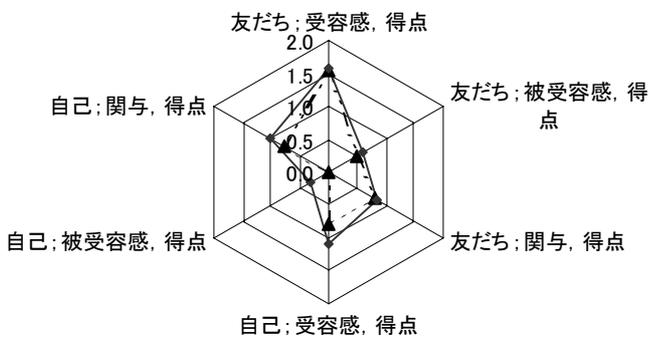


図 2-18 小 6 ; 日・午前「スポーツクラブの活動に行く」の、子どもの意識、学年全体との比較

—▲— 学年 —◆— 日・午前「スポーツクラブ」



この項目を選んだ理由は、先に「休日の昼間、小学6年生では1割以上がスポーツクラブの活動している」と述べた。これも、小学6年生の活動の特徴のひとつとして取り上げる。

上の図 2-17 は休日への期待を、図 2-18 は友だちと自己に対する「子どもの意識」を、それぞれ該当する子どもたちと学年全体の回答結果を比較したグラフである。この2つのグラフから、日曜日の午前「スポーツクラブの活動に行く」と回答した小学6年生の子どもたちの傾向は、次のようにまとめることができる。

- 自分の所属するスポーツクラブやチームの友だちと一緒に活動するので、休日を「友だちと過ごせるので、うれしい」と思う子どもが179人中116人と学年の値の2倍、65%にのぼる。
- 友だちへの意識や自己への意識を学年全体と比較すれば、自己への意識は、若干ではあるが高い傾向がみえる。

VI 中学2年生、土曜日・夜「学習塾に行く」

この項目を選んだ理由は、先に「自発性と満足感の数値が、他の時間帯や小学生に比べると、低い数値となっている」と指摘した。前述IVで小学

図 2-19 中 2 ; 土・夜「学習塾に行く」の、休日への期待、学年全体との比較

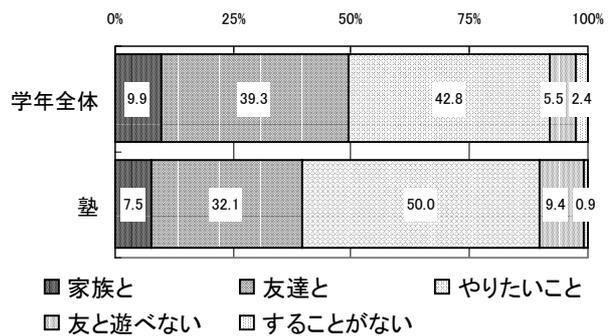


図 2-20 中 2 ; 土・夜「学習塾に行く」の、過ごし方の計画性、学年全体との比較

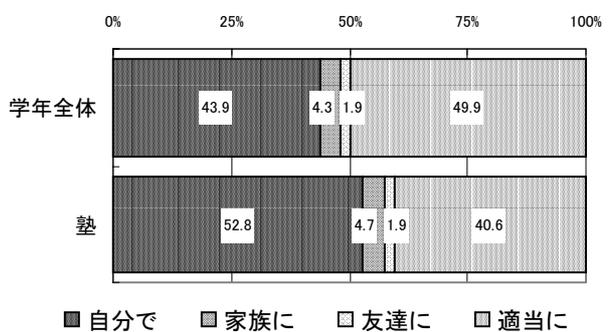
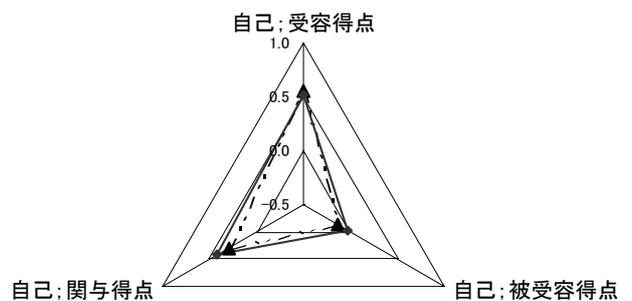


図 2-21 中 2 ; 土・夜「学習塾に行く」の、自己への意識、学年全体との比較

—▲— 学年全体 —◆— 塾

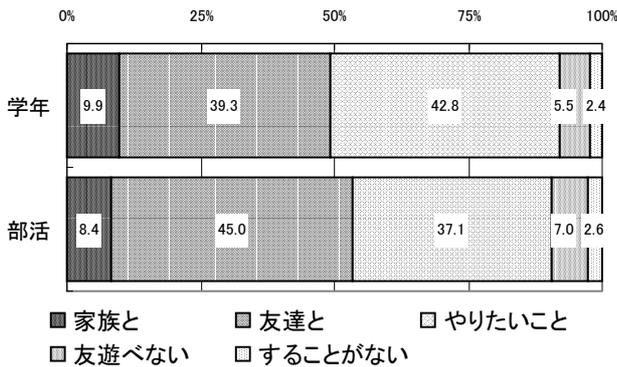


6年生についてみたので、同じように検討する。

上の3つのグラフ図 2-19, 20, 21 を先の図 2-14, 15, 16 と比較すると、大きな違いは認められないが、「自己への意識」との関連を示した図 2-21 では、「今の自分が好きか」の被受容感で、学年全体を少し上まわっている。土曜日の夜「学習塾に行く」と回答した中学2年生の子どもたちの傾向は次のようにまとめることができる。

- 休日の過ごし方は「自分で決める」度合いが高いが、その分「友だちと遊べない」ので、休

図 2-22 中 2 ; 土・午前「部活動に行く」の、
休日への期待, 学年全体との比較



日前には「うれしくない」と思う子どもと、「やりたいことができるので、うれしい」と思う子どもがいるが、小学6年生ほど学年全体の結果との差が大きいわけではない。

- 自己への意識との関連では、学年全体と学習塾に行く子どもとでは、ほとんど変わらなかった。したがって、自発性や満足度の低さについては、本調査の中ではとらえきれなかった。

VII 中学2年生, 土曜日・午前「部活動に行く」

この項目を選んだ理由は、中学生の活動の大きな特徴のひとつとしてとらえられるからである。

図 2-22 は休日への期待を、図 2-23 は友だちと自己に対する「子どもの意識」を、それぞれ該当する子どもたちと学年全体の回答結果を比較したグラフである。

学年全体の人数は 1030 人で、その 41.7%にあたる 429 人のデータとの比較なので、大きな違いは表れないが、この2つのグラフから、土曜日の午前「部活動に行く」と回答した中学2年生の子どもたちの傾向は、次のようにまとめることができる。

- 休日への期待では「友だちと一緒に過ごせるので、うれしい」と、反対に「友だちと遊んだりできないので、うれしくない」の「友だち」にかかわる2つの回答で少し増えている。
- 子どもの意識では、友だちに対する意識は、学年の平均より若干高い。

ところで、土曜日・午前「部活動をしている」中学2年生のうち、午後も引続き「部活動をしている」生徒は 114 人で、これは土曜日・午後「部活動をしている」201 人の 56.7%にあたることも付け加えておきたい。

VIII 日曜日・夜「家族と過ごす」

小学4年生と小学6年生

この項目を選んだ理由は、子どもと家族とのか

図 2-23 中 2 ; 土・午前「部活動に行く」の、
子どもの意識, 学年全体との比較

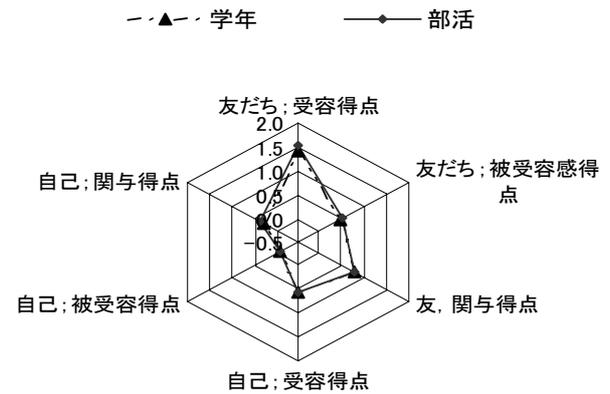
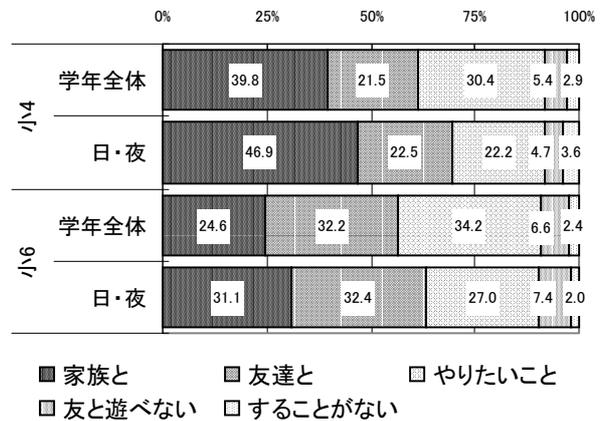


図 2-24 小 4・小 6, 日・夜「家族と過ごす」;
休日への期待, 学年比較



かわりは、図 2-1, 2-2 からわかるとおり、小学生の方が中学生よりも多く、そのことから子どもの成長にとっても大切なこととして考えられる。

具体的に家族とどのように過ごしているのかは不明であるが、上の図 2-24 は、「休日への期待」としてあげた設問 7 の回答結果を、学年全体の回答結果と比較したグラフである。

該当の子どもたちと学年の回答結果との違いは、休日前の気持ちとして、明らかに「家族と一緒に過ごせるので、うれしい」に表れている。また、小学4年生の方が小学6年生よりも数値が高いということは、この年代の子どもたちにとって、子ども自身が家族とのかかわりを求めていることを示している。

**IX 土曜日・午後「友だちと出かける, 外で遊ぶ」
小学6年生と中学2年生**

この項目を選んだ理由は、子どもの人とのかわりは、子どもの成長にしたがって「家族」から

「友だち」へと広がる，と同時に重要さも増してくる。右の図2-25は，前述の「家族と過ごす」と同様に，「休日への期待」としてあげた設問7の回答結果を，学年全体の回答結果と比較したグラフである。

該当の子どもたちと学年の回答結果との違いは，休日前の気持ちとして，明らかに「友だちと一緒に過ごせるので，うれしい」に表れている。また，中学2年生の方が小学6年生よりも数値が高いということは，この年代の子どもたちにとって，子ども自身が友だちと一緒に過ごしたいと望んでいることを示している。学年が進むにしたがって，友だちと良好な関係を築いている子どもたちが「友だちと外で遊んでいる」と解釈できるのではないだろうか。

X 土・日の夜「ひとりで外に出かける」

- 小学4年生；土曜・夜(5人)，日曜・夜(3人)
- 小学6年生；土曜・夜(3人)，日曜・夜(4人)
- 中学2年生；土曜・夜(1人)，日曜・夜(7人)

子どもの休日の活動は，保護者の責任の下で，基本的に自由である。しかし，子どもが夜，ひとりで外に出かけていることについては，問題を感じざるを得ない。そこで，人数は極めて限られているのであるが，この子どもたちについて考察する。

まず，この子どもたちの昼間の活動を見る。

土曜日の子どもについては，直近の土曜日・午後と直後の日曜日・午前の活動を，日曜日の子どもについては，日曜日・午後の活動を調べたのが表2-5である。また，この子どもたちの設問7「休日への期待」と設問9「休日の振り返り」の回答

表2-5 土・日の夜「ひとり外に出かける」昼間の活動

活動項目	小 4		小 6		中 2		
	土・夜	日・夜	土・夜	日・夜	土・夜	日・夜	
	(5人)	(3人)	(3人)	(4人)	(1人)	(7人)	
	土・午後	日・午前	土・午後	日・午前	土・午後	日・午前	日・午後
勉強					1		
読書	1						1
雑誌・マンガ							1
休養・寝る	1	2					1
テレビ・ビデオ・音楽		1					1
ゲーム					1		1
家族と		1					
習い事	1		1	1	1		
スポーツクラブ	1	1	2	2	1	1	2
ひとり,外	1	1	1				
友だち,外			1				

図2-25 小6・中2，土・午後「友だちと出かける，外で遊ぶ」；休日への期待，学年比較

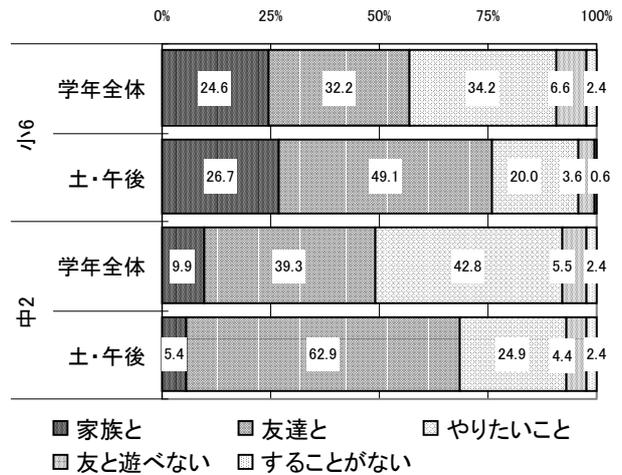


図2-26 土・日の夜「ひとり外に出かける」の休日への期待

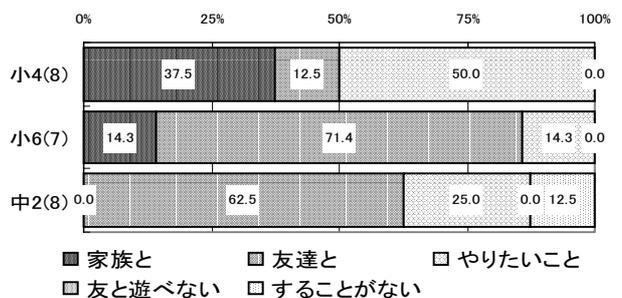
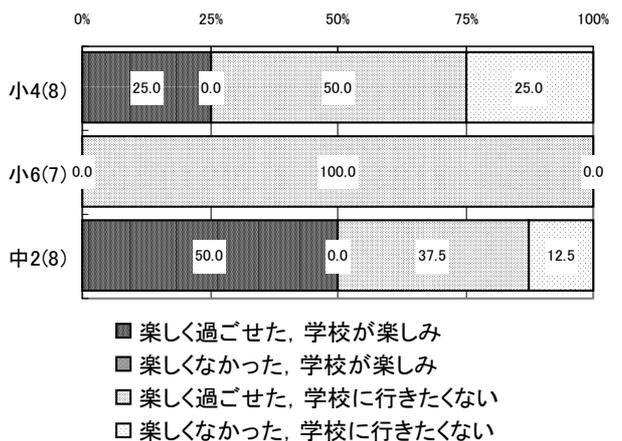


図2-27 土・日の夜「ひとり外に出かける」の休日の振り返り



結果を図2-26，2-27に示した。

前述したように，人数が極めて限られているので，軽々に結論を導くことはできないが，表2-5からは，土曜日・夜の子どもたちでは，土曜日・午後と日曜日・午前の活動の一致が見られた。図2-26からは，「友だちと過ごせる」や「やりたい

ことができる」, 図 2-27 からは, 休日は「楽しく過ごせた」と受け止めていることがわかる。

XI 土・日の夜「友だちと外に出かける, 外で遊ぶ」

小学 4 年生 ; 土曜・夜(1 人), 日曜・夜(6 人)
 小学 6 年生 ; 土曜・夜(4 人), 日曜・夜(2 人)
 中学 2 年生 ; 土曜・夜(12 人), 日曜・夜(19 人)

前述 X と同様に考察する。表 2-6 は, 該当の子どもたちの昼間の活動である。図 2-28 は, 「休日への期待」を, 図 2-29 は「休日の振り返り」の回答結果である。前述 X と同様に, 該当者の人数が非常に少ないのであるが, それでも中学 2 年生では合計 31 人である。表 2-6 では, 日曜日・夜 19 人のうち, 日曜日・午後の活動では, 「友だちと家で」や「友だち, 外」に合計 10 人である。つまり, この 10 人は日曜日の午後から夜まで引き続いて「友だち」と活動していることがわかる。

図 2-28 の小学 4 年生では休日への期待として, 友だちとかかわりを示す「一緒に過ごせるのでうれしい」「学校で遊んだりできないので, うれしくない」の回答結果の合計は 57.2%, 図 2-29 では, いずれの学年でも休日は「楽しかった」と振り返り, 翌日, 月曜からの学校へは「楽しみ」と「行きたくない」と分かれている。

ところで, 土曜日の夜「ひとりで外に出かけた」「友だちと外に出かけた」する子どものうち, 日曜日の夜, 同じように「ひとりで外に出かけた

表 2-6 土・日の夜「友だちと外に出かける, 外で遊ぶ」

活動項目	昼間の活動					
	小 4		小 6		中 2	
	土・夜 (1人)	日・夜 (6人)	土・夜 (4人)	日・夜 (2人)	土・夜 (12人)	日・夜 (19人)
	土・午後	日・午前	土・午後	日・午前	土・午後	日・午前
勉強		1				
読書		1				
電話・メール					1	1
休養・寝る						4
テレビ・ビデオ・音楽					1	2
ゲーム	1					
家族と			1			
友だちと家で	1				1	1
習い事					1	1
学習塾					1	1
部活					4	3
スポーツクラブ		2	2	3	2	1
ひとり, 外		1				
家族, 外				1		1
友だち, 外		1	1		2	5

図 2-28 土・日の夜「友だちと外に出かける, 外で遊ぶ」, 休日への期待

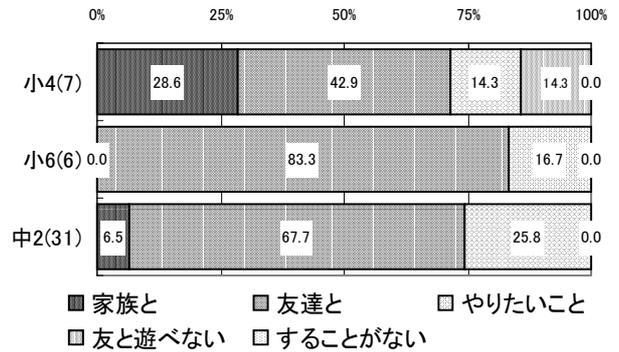


図 2-29 土・日の夜「友だちと外に出かける, 外で遊ぶ」, 休日の振り返り

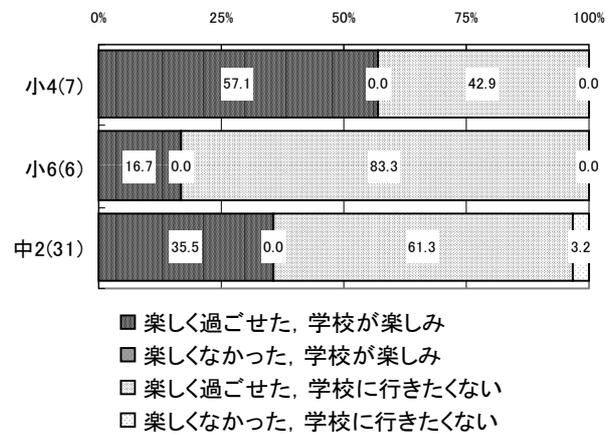


表 2-7 土・夜の該当者のうち, 日・夜の「外出」人数

日曜日	小 4		小 6		中 2	
	ひとり外	友だち外	ひとり外	友だち外	ひとり外	友だち外
土曜日	1	1	2	0	1	0
日曜日	0	0	0	2	0	7

り「友だちと外に出かけたり」している子どもの人数を, 学年ごとに表 2-7 に示す。

該当する人数に違いがあるので, この表の結果については即断できない。しかし, 土曜日や日曜の夜に「外に出ている」子どもたちについては, 両日とも「外に出ている」可能性があることを指摘しておきたい。

X・XI と土曜日・日曜日の夜, 「外に出かける」を取り上げた。この子どもたちの自発性や満足感の数値が高いことについては前述した。

この子どもたちについては, 一人ひとりについて個別に実態を把握し, 子どもの生活が改善される方途を探っていかなければならないのではないだろうか。

第2節 休日の生活と学校生活

(1) 「学習塾に行くを含めて、勉強する子ども」と「それ以外の活動をする子ども」

前節では、子どもたちの休日の活動について、活動ごと、学年ごとに概観し、さらにいくつかの活動については、他の設問の回答結果にも関連付けながら考察した。

ここでは、「勉強する」と回答した子どもたちと「学習塾に行く」と回答した子どもたちを「勉強する」とし、「勉強する・学習塾に行く」と回答しなかった子どもたちを「勉強以外」として、この2つのグループの子どもたちを学校生活とのかかわりにおいて分析する。もとより、休日に学校生活にかかわる学習を少しもしていないからといって、直ぐに非難されるべきではないだろう。子ども自らが関心をもつ活動に、努力を重ね取り組んでいる子どももいるだろう。しかし、我々教師は、普段から家庭学習の重要性については、保護者にも協力を要請しながら、子どもに指導しているのが、一般的ではないだろうか。

すべての子どもに、家庭学習が生活習慣として定着することを願って、考察を進めたい。

《子どもの抽出方法》

まず、土曜日・午前から日曜日・夜までの6つの時間帯のうち、1つ以上の時間帯で1「勉強する」と回答した子どもを取り出した。2つ以上の時間帯で1「勉強する」と回答した子どもについては、早い時間帯に限ることとした。その理由は、例えば、土曜日・午前と日曜日・夜の自発性や満足感をみると、総じて土曜日・午前の方が高いと判断できるからである。11「学習塾に行く」についても同様の方法とした。したがって、子どもによっては1「勉強する」と11「学習塾に行く」の両方で取り出した子どもがいる。

この1「勉強する」と11「学習塾に行く」の子どもたちを改めて「勉強する」とした。

また、「勉強以外」とは、「勉強する」「学習塾に行く」の回答が全くなかった子どもである。

それぞれのグループの人数を表2-8に示す。また、表中の()で示した数値は、学年全体の人数に対するパーセンテージである。

表2-9には、1「勉強する」と回答した子どものうち、いくつの時間帯で回答しているかを、時間帯の回数ごとに該当の人数を示した。同じく表2-10には、参考として「学習塾に行く」についても同様に示した。

表2-8からは、休日に勉強する小学生は50%

表2-8 「学習塾に行くを含めて、勉強する」と「勉強以外」の人数

	学年人数	勉強する	勉強以外
小4	1157	626(54.1)	586(50.6)
小6	1147	696(60.7)	567(49.4)
中2	1030	343(33.3)	723(70.2)

表2-9 「勉強」時間帯数別人数

時間帯数	1	2	3	4	5	6
小4	353	170	15	7	1	1
小6	325	148	34	14	3	0
中2	138	63	7	1	0	1

表2-10 「塾」時間帯数別人数

時間帯数	1	2	3	4	5	6
小4	70	9	0	0	0	0
小6	84	38	29	16	4	1
中2	126	7	0	0	0	0

以上であるが、中学生では30%であること、表2-10からは、小学4年生と中学2年生で学習塾に行くほとんどの子どもは、土曜・日曜の6つの時間帯のうち1回だけが多いのであるが、小学6年生では2回以上行っている子どもが、小学4年生や中学2年生に比べ多いことがわかる。表2-9では、休日に家庭学習をしている子どもの半数以上は2回以上の時間帯で勉強している様子が見えるが、多ければいいということでもないであろう。

次に、「勉強する」子どもたちの自発性と満足感の関連を、小学4年生と中学2年生の場合で、次ページ図2-30、2-31に示す。これら2つのグラフからは、勉強を「自分からしたり、少しぐらいはしたかった」と自発性の高い子どもほど、やって「よかった、楽しかった、まあよかった、楽しかった」と満足感も高い傾向が見える。しかし、「あまり」とか「したくない」と思いながらも勉強している子どもたちは、自分で「しなければならないこと」として勉強しているのであるから、満足感が高まっていくような手立てを講じていく必要がある。学級で休日に勉強する雰囲気が醸成され、その勉強したことが、それぞれの子どもに即して正しく評価されることが必要なのではないだろうか。なお、小学6年生については図示していないが、自発性と満足感の関連は、小学4年生や中学2年生と同様の結果を示していることを、付け加えておきたい。

図 2-30 小 4 ; 「勉強する」(626 人)の自発性別満足感

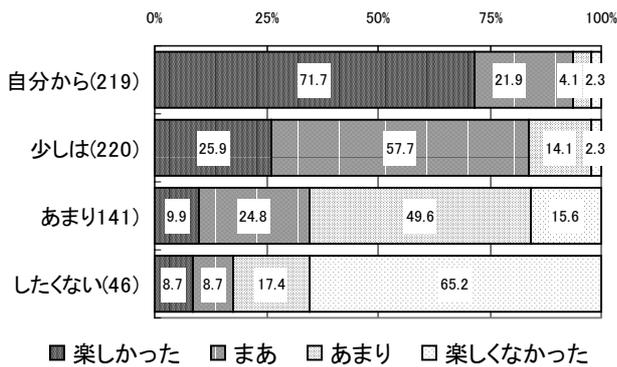
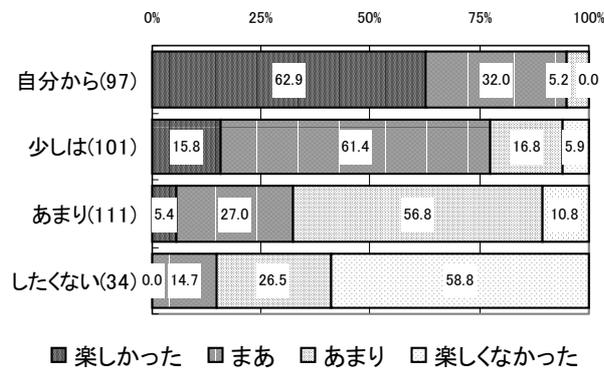


図 2-31 中 2 ; 「勉強する」(343 人)の自発性別満足感



次に、この2つのグループの「休日の振り返り」の回答結果を図2-32に、「授業の理解度」の回答結果を図2-33に、「休日の経験を、学校生活に活かす」の回答結果を図2-34に示す。

図2-32「休日の振り返り」では、小学生では「勉強する」の方が、「勉強以外」に比べて、「学校が楽しみ」とした子どもが多い。中学2年生では、逆に「勉強以外」の方が、3%ほど多くなる。

図2-33「授業の理解度」では、いずれの学年でも「勉強する」の方が、「勉強以外」に比べて、授業の理解度が促進されている子どもが多い。

図2-34「休日の経験を、学校生活に活かす」では、これもどちらかと言えば「勉強する」の方が、「勉強以外」に比べ高くなっている。この「経験」の具体的な事柄はわからないが、家庭で学習した事柄とも考えられるのではないだろうか。

ところで、昨年度の調査結果の考察では、授業の理解度と家庭学習について、「勉強することの目的、学習内容の理解の促進、その定着との関連性を十分に考えた取組」の必要性を、「家庭の協力を得て進めていく必要がある」と述べた。

子どもの家庭学習については、より一層の工夫をしながら、日常の授業内容との関連を図り、習慣化できる手立てを講じる必要があると考える。

図 2-32 「勉強する」「勉強以外」別休日の振り返り

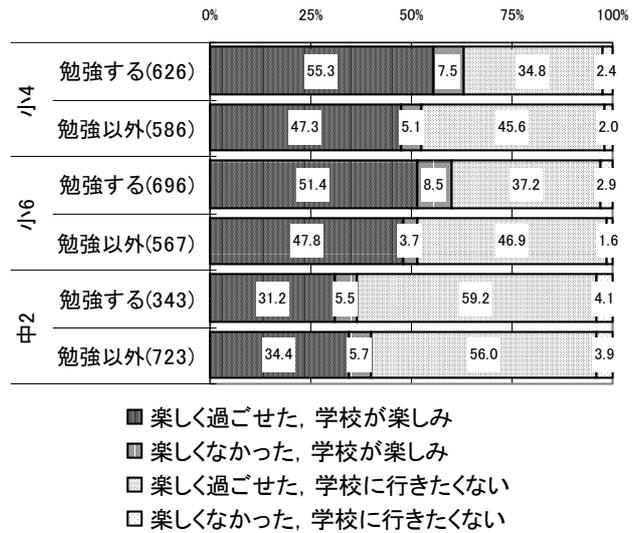


図 2-33 「勉強する」「勉強以外」別授業の理解度

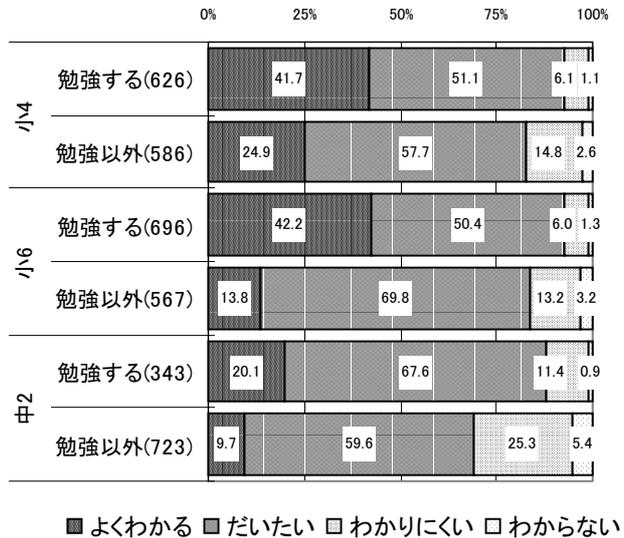
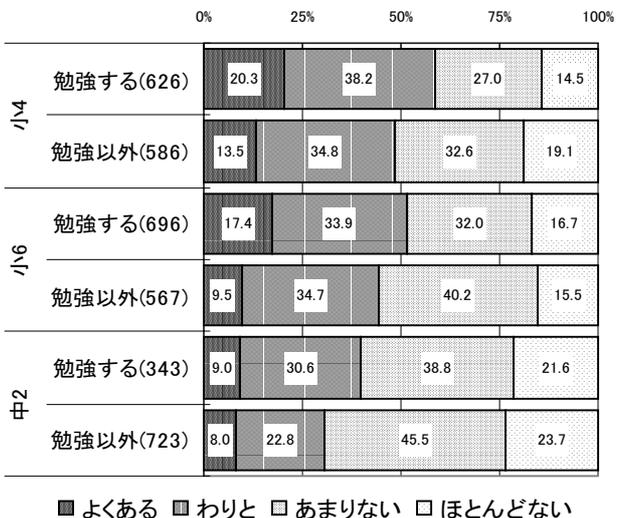


図 2-34 「勉強する」「勉強以外」別 休日の経験を、学校生活に活かす



(2) 休日の生活と学校生活との関連

この項では、設問 5「日曜日の就寝時刻」、設問 9「休日の振り返り」、この設問 9 にかかわって設問 19「学級への関与」、および設問 21「学校生活の楽しさ」を、《設問 22：学校の授業や活動で体験や経験したことを、土曜日・日曜日にさらに「やってみよう」としたことがありますか》、反対に、《設問 23：土曜日・日曜日の体験や経験が、学校の授業や活動に、役立ったことがありますか》の回答結果を、学年ごとに示しながら休日の生活と学校生活の関連を考察する。

I 日曜日の就寝時刻について

図 2-35 から 2-37 は、日曜日の就寝時刻の回答結果を、設問 9「休日の振り返り」とクロス集計(12)したグラフである。

就寝時刻の時間区分別の回答者数は、学年によって異なるのであるが、就寝時刻が遅い子どもほど、早い子どもに比べて、「学校に行きたくない」の回答割合が増えている。日曜日の夜、午前 1 時を過ぎてから寝ている子どもの 55%から 70%の子どもの気持ちは、設問 9 の選択肢の文言から「休日は楽しく過ごせたのだが、翌朝、月曜日からの学校に行きたくない」と思っている。

図 2-35 小 4；日曜日の就寝時刻別休日の振り返り

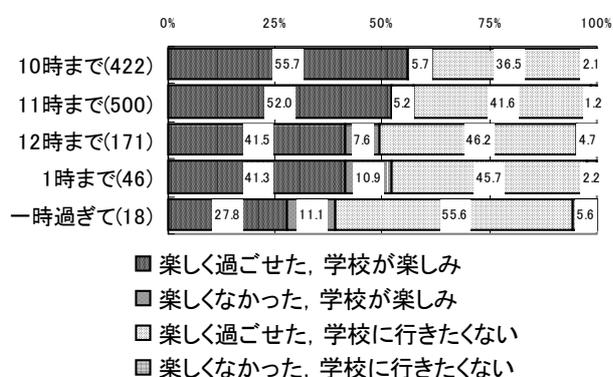
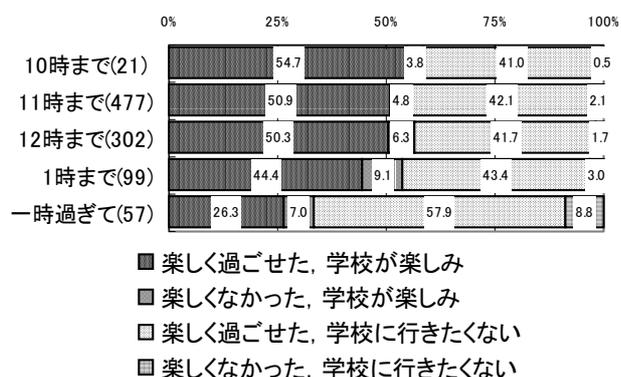


図 2-36 小 6；日曜日の就寝時刻別休日の振り返り



ところで、この「1 時を過ぎてから」の回答人数、中学 2 年生 120 人は学年の 12%にあたることを考えると、クラスの 1 割の子どもは、月曜日の朝、学校の生活にスムーズに入ってきていないのではないかと危惧される。

II 休日の振り返りについて

ここでは、休日の振り返りをとおして、学校生活との関連をみる。

図 2-38 は、設問 9 と設問 19 のクロス集計の結果を、中学 2 年生の場合で示している。

図 2-39 は、設問 9 と設問 21 のクロス集計の結果を、小学 4 年生の場合で示している。

図 2-38 からは、休日が「楽しく過ごせたので、学校に行くのが楽しみだ」と回答した子どもたちの学級への関与は、休日が「楽しく過ごせなかったので、学校に行きたくない」と回答した子どもたちのそれより、上回っている結果をみると、休日の生活の楽しさや充実感と子どもの学校生活の基盤である「学級」への、その子自身の「かかわりの度合い」に関連があることを示している。

図 2-39 からでも、休日が「楽しく過ごせたので、学校に行くのが楽しみだ」と回答した子どもたちが、休日が「楽しく過ごせなかったので、学校に行きたくない」と回答した子どもたちより、学校生活が楽しいと回答している。つまり、子どもたちの休日の生活の楽しさ・充実感と学校生活の楽しさには、関連があることを示している。

次に、子どもたちの学級への関与と学校生活の楽しさとの関連を、小学 6 年生の場合で図 2-40 に示す。明らかに、学級の活動に積極的に取り組む子どもほど、学校生活が楽しいと回答している。

子どもたちは休日に様々な活動をしているが、学校生活との関連においては、休日の生活が楽しく充実している子どもほど、自ら学校生活を楽しく積極的に過ごしているととらえられる。

図 2-37 中 2；日曜日の就寝時刻別休日の振り返り

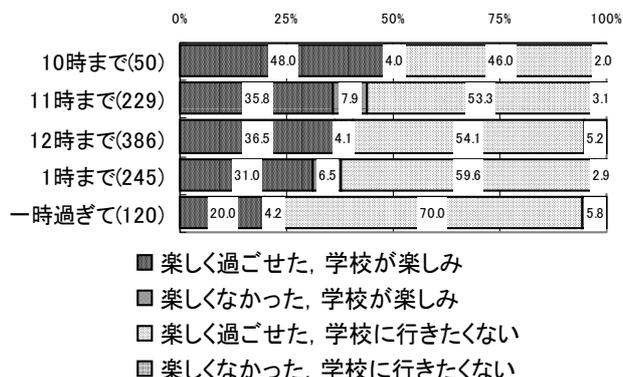


図 2-38 中 2 ; 休日の振り返り別学級への関与

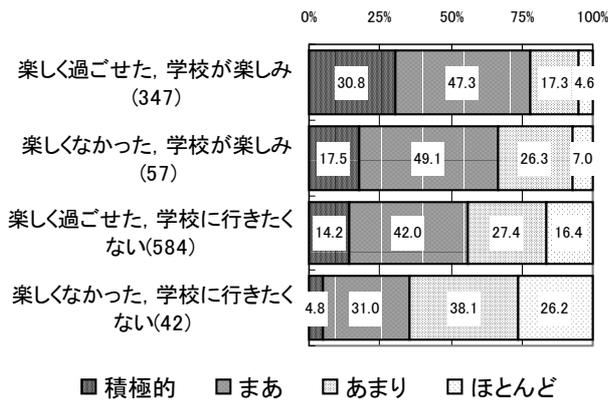


図 2-41 小 4 ; 学校の経験を休日に活かす別

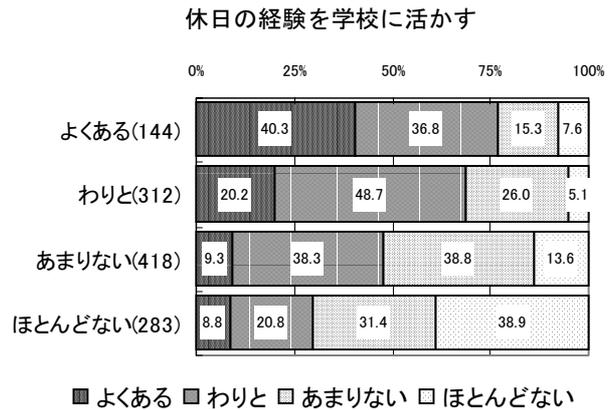


図 2-39 小 4 ; 休日の振り返り別学校生活の楽しさ

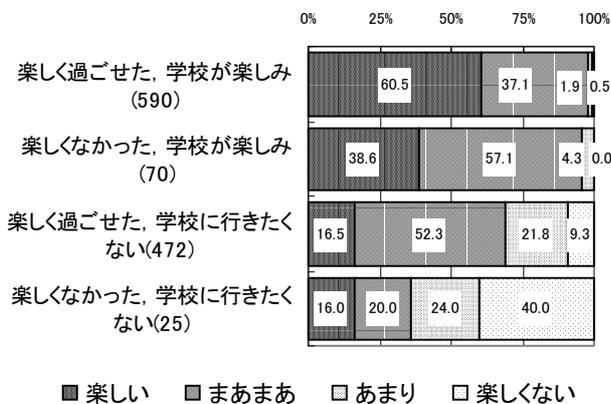


図 2-42 小 6 ; 学校の経験を休日に活かす別

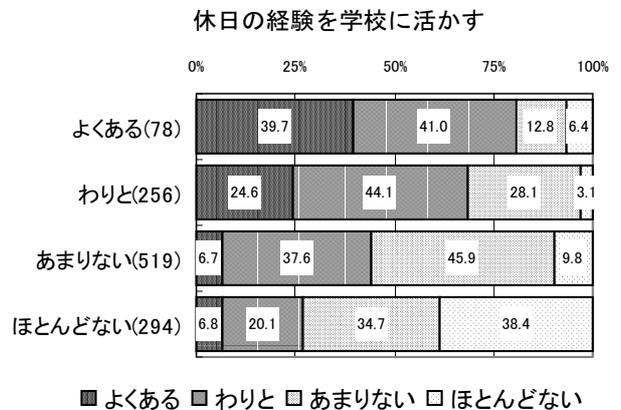


図 2-40 小 6 ; 学級への関与別学校生活の楽しさ

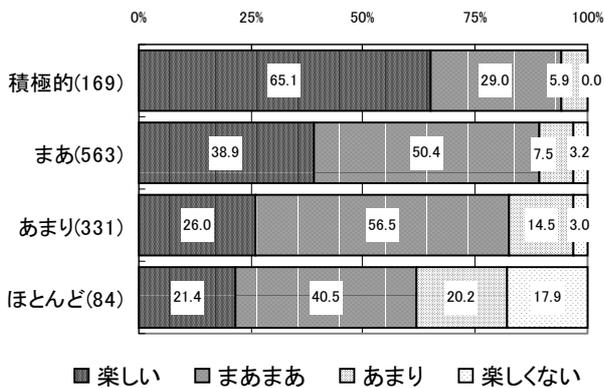
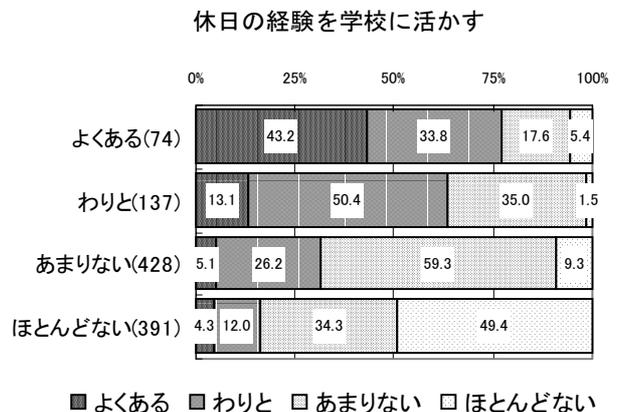


図 2-43 中 2 ; 学校の経験を休日に活かす別



なお、図 2-38 から 2-40 の各クロス集計の項目のうち、グラフを挙げなかった学年についても、項目ごとにほぼ同じような結果であったことを付け加えておく。

Ⅲ 「学校の経験を、休日に活かす」、「休日の経験を、学校で活かす」について

この項の最後に、「学校の経験を、休日に活かす」と「休日の経験を、学校で活かす」のクロス集計の結果を、学年別に図 2-41 から 2-43 に示す。

これらのグラフからは、学校の経験を休日の生

活に活かしている子どもは、休日の経験を学校生活に活かしている子どもが多い、反対に言えば、学校の経験が休日に活かされていない子どもは、休日の経験を学校生活に活かしていない子どもが多いということである。

つまり、学校生活と休日の家庭生活が、双方向的にかかわりあっている子どもと、学校生活と休日の家庭生活が、何ら関連していない子どもとに、分かれているのではないかととらえられる。

第3節 休日の暮らしと子どもの意識

図2-44 子どもの意識の全体像

前節まで、子どもの休日の暮らしについて、「活動」や「気持ち」を中心に見てきた。ここでは、そのように活動している「子どもの意識」を、まず学年ごとに概観した後、子どもの生活に即していくつかの項目ごとに考察する。

(1) 子どもの意識の全体像

図2-44は、子どもの意識にかかわる設問の回答結果を得点化し、それぞれの項目ごとに平均点を算出し、学年別に示したグラフである。(得点化の方法については、p.11参照)

概観すれば、まず、小学4年生が外側に、ついで小学6年生、中学2年生と学年が進むにしたがって、内側に描かれる。また、意識の対象や観点によって、学年間の差に大小があることがわかる。

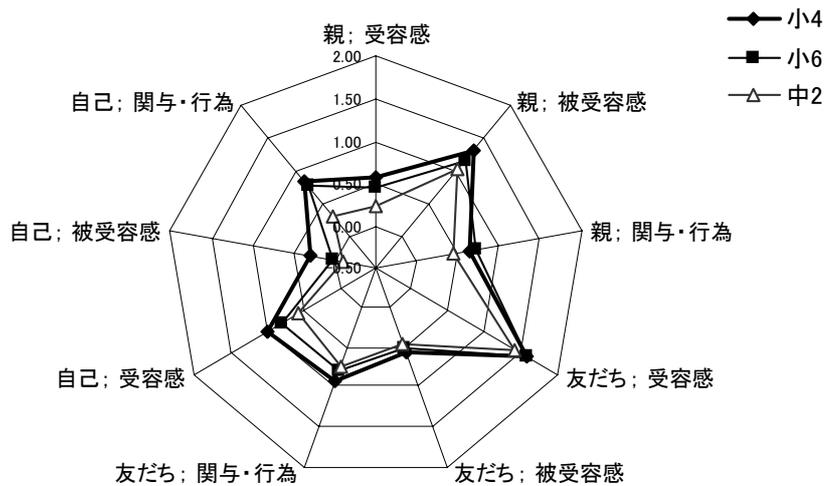
それぞれの観点の設問に即して、このグラフを意識の対象別に読み取ると、

「親への意識」は、どの学年でも多くの子どもたちが、家の人には大事にされていると意識している。家の人を素直に聞いたり、悪いことをしたと思ったときは、自分から謝ることもできるが、学年が進むにしたがって、その意識は、少しずつ「素直に聞けなかったり、自分から謝れなかったり」する傾向になる。

「友だちへの意識」は、周りの友だちは「いい友だちだ」と意識している。友だちが困ってれば、自分から助けようとするが、友だちからの信頼については、自信をもてない傾向がうかがえる。また、この「友だちへの意識」では、学年進行による差が、いずれの観点においてもほとんどみられないことが特徴である。

「自己への意識」は、「家の人には大事にされている」や「周りの友だちはいい友だちだ」と肯定するほどではないにしても、自分は「やればできる力がある」と意識している。ところが、「苦手なことの克服のために努力している」については、中学生では小学生ほど肯定できない。「今の自分が好きか」では、どの学年でも低くなり、小学4年生では肯定的に意識できるが、小学6年生では肯定・否定の中間の曖昧な自己ともいえるようにとられ、中学2年生では、否定的な意識になる。

以上、子どもの意識をその対象ごとに概観した。



ところで、このような傾向や学年進行に伴う違いは、昨年度の調査ですでに明らかとなっていた。

そこでは、小学4年生から中学2年生の期間の子どもの発達について、無藤隆(12)の著述を手がかりに、次のようにまとめた。

人との関係では、子どもの身近な大人から同年代の友人へのウエイトが大きく、友人との関係で自分を見つめるようになる。そのような周囲の人との関係の中で、次第に自己を相対的にとらえることができるようになっていく。したがって自他に対する感情も否定・肯定の感情が、同時に成り立つことも理解できるようになる児童期中期から、青年期初期への移行である。

そして、個々の子どもの意識をみていくときの大切なこととして、肯定的にしる否定的にしる、そのように判断した理由が具体的に何なのか、どのようなことを根拠にそう考え、望ましい方向へ自分でどのように努力しているのかが大事なのではないかと、このような子どもから大人への移行期の変化、思春期への移行を子どもの成長、発達の姿として受け止め、内面の円満な成長を育てていくことが必要ではないかと述べた。

そこで次に、昨年度の調査データと比較したグラフを、学年別に次ページ図2-45から2-47に示す。なお、昨年度の調査対象人数は表2-11のとおりである。

表2-11 昨年度と本年度の調査人数一覧

	昨年度調査人数	本年度調査人数
小学4年生	1078	1157
小学6年生	1096	1147
中学2年生	1000	1030

図 2-45 小 4 ; 子どもの意識比較

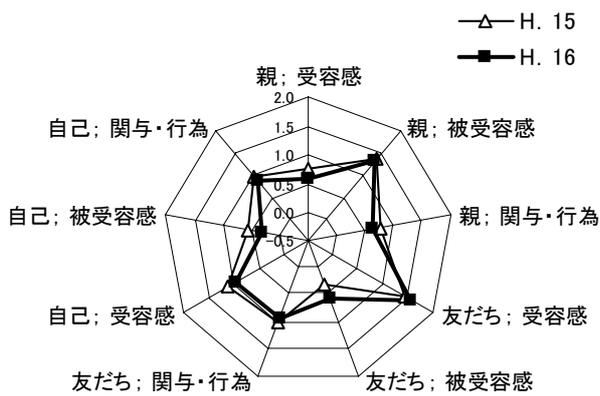


図 2-46 小 6 ; 子どもの意識比較

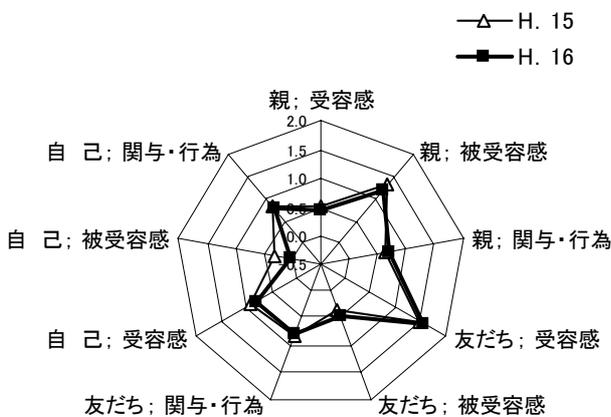


図 2-47 中 2 ; 子どもの意識比較

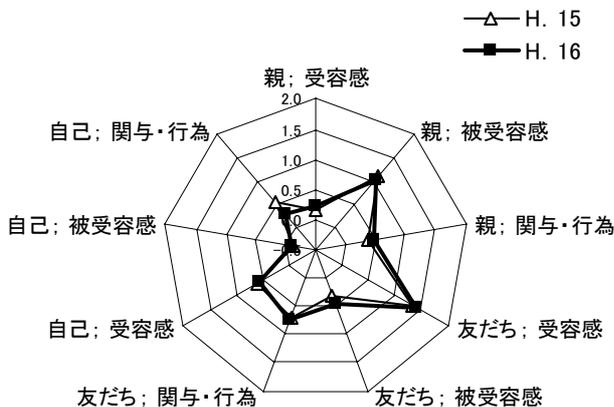


図 2-45 から 2-47 をみると、子どもの意識は、昨年度と本年度で大きな違いがないことがわかる。あえて細かく述べると、友だちへの意識の被受容感「友だちからの信頼」については、どの学年でも約 0.2 の上昇がみられ、小学 4 年生・6 年生では自己への意識の被受容感「自分のことが好き」で、中学 2 年生では同じく自己への意識の関与・行為「苦手なことの克服のために努力する」で、約 0.2 の下降がみられる程度である。

このことは、年度を代えて実施しても同様の結果であったことは、「子どもの意識」をとらえる上での、この調査の精度の高さを示している。

(2) 子どもの「生活」と「意識」

ここでは、子どもの意識を個別の活動項目以外の設問に関連づけてみていく。

昨年度の研究では、子どもの生活実態は、その子どものもつ考えや思い、「意識」の表れとしてとらえ、例えば、子どもの「気持ちの安定と意識」として、生活実態にかかわる設問「家にいるときの気持ち」「学校の楽しさ」の回答結果のうち、この 2 問ともに肯定している子どもと、ともに否定している子どもを取り出し、この二群の子どもの意識を、親・友だち・自己の三者に対する観点ごとに比較した。結論を述べると、ともに否定している群では、親への意識が否定的であること、自己への意識では、特に、被受容感で意識が大きく低下していることをデータを示して述べ、気持ちの安定にとって、相手に対する意識との関連は勿論であるが、自分に対する自信や愛着、自尊心が大きく影響している、と考察した。

そこで本研究でもこの方法を踏襲し、関連する設問の回答結果ごとにグルーピングして平均点を算出し、グループ間での違いを明らかにする。

考察する設問は次のとおりである。

I 設問 7 「休日への期待」

休日前の気持ちを、一緒に活動する人とのかわりを表す文言を選択肢に配して、休日が「うれしい」か「うれしくない」かを、尋ねている。

II 設問 9 「休日の振り返り」

休日を過ごして、休日全体の自己の受け止めを、選択肢の文言ではさらに、翌日(月曜日)からの学校へ行く意欲をも尋ねている。

学校に行くことは「当たり前」のこととして認識されているが、学校へ通うことの意味と合わせて尋ねた。

III 設問 22 「学校の経験を、休日に活かす」

23 「休日の経験を、学校で活かす」

この 2 つの設問は対の関係である。学校や休日の活動で活かす事柄は、具体的にはわからないのであるが、子ども自身の毎日の生活の在り方や態度が反映されると考える。

IV 設問 24 「休日への願い」

この設問の文言は《土曜日や日曜日の生活で、もっとこうしたいと思うことはどのようなことですか》で、子どもによっては、「願望」として回答した子どももいるであろうが、普段の休日の過ごし方に対する意識が反映される設問と考えた。

I 「休日への期待」と子どもの意識

図2-48 から 2-50 は、設問7の選択肢別に子どもの意識を示した。

図2-48 小4；休日への期待別子どもの意識

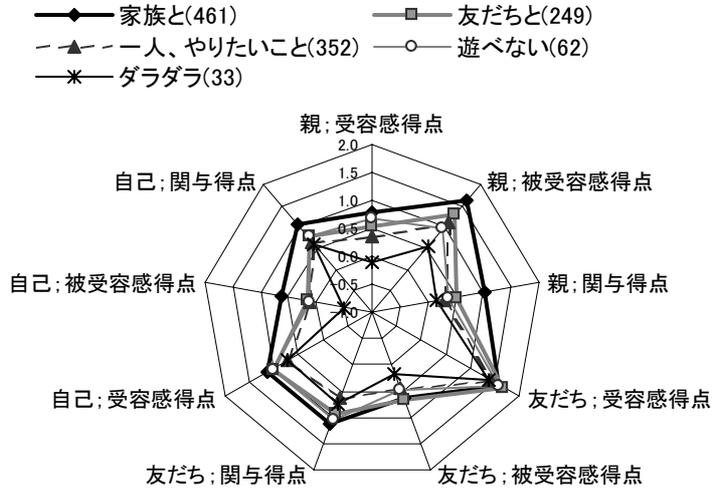


図2-49 小6；休日への期待別子ども意識

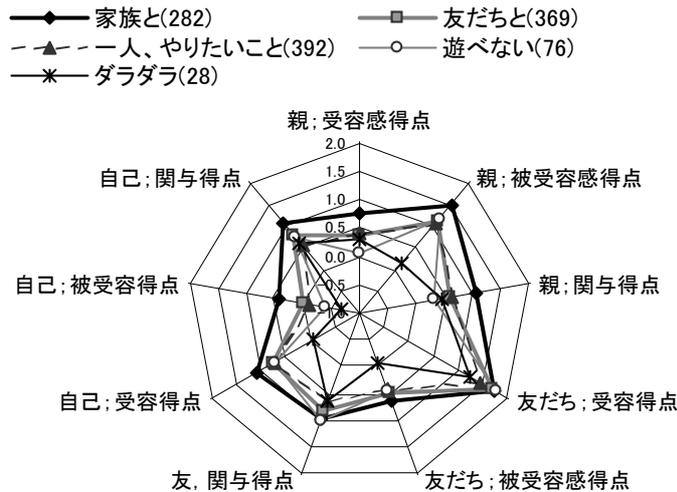
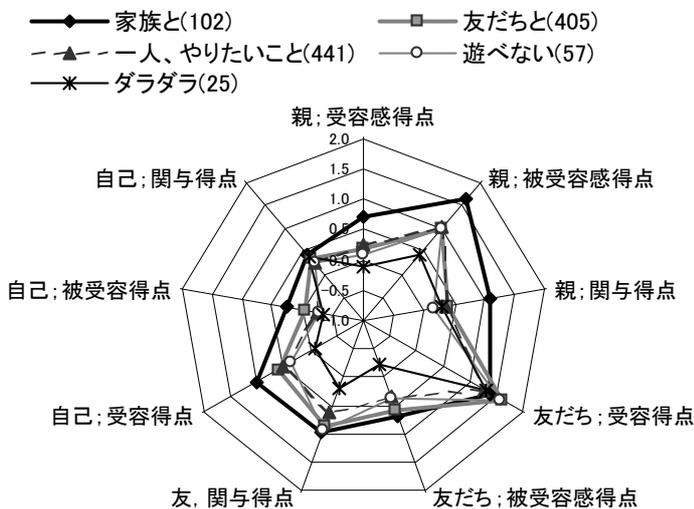


図2-50 中2；休日への期待別子どもの意識



これらのグラフからは次のようなことがわかる。

- ① どの学年でも「家族と一緒に過ごすので、うれしい」と回答した子どもたちの得点が、他の選択肢で回答した子どもたちよりも高い。
- ② 「友だちと過ごすので、うれしい」「ひとりでやりたいことができるので、うれしい」「学校で友だちと遊んだりできないので、うれしくない」が、その内側に、比較的近似の値で描かれる。
- ③ 「することがなかったり、ダラダラ過ごしてしまうので、うれしくない」はどの学年でも一番内側に描かれる。
- ④ 一番数値の高い「家族と」に注目し、学年による違いを見ると、中学2年生では、親への受容感、自己への被受容感、関与・行為で、小学生に比べ、他の観点より低くなる。
- ⑤ 「ダラダラ」に注目してみると、小学4年生で、自己への被受容感、親への受容感・被受容感での他のグループとの差が、中学2年生では、自己への受容感、友だちへの被受容感でも他のグループとの差が表われてくる。

そこで、この子どもたちの、休日の過ごし方を、活動項目別に、平均値として表2-12に示す。

表2-12 「ダラダラ」の活動項目別平均値

	小4	小6	中2
勉強	10.1	8.9	6.0
読書	4.5	3.6	2.0
マンガ	5.1	5.4	4.7
電話	0.5	1.8	3.3
休養・寝る	14.1	11.9	21.3
テレビ	21.2	23.8	14.7
ゲーム	9.1	8.3	4.7
家族と	13.1	8.9	8.7
友だちと	2.5	3.0	2.0
習い事	3.5	4.8	5.3
学習塾	0.5	4.8	0.7
部活動	1.0	0.6	13.3
スポーツ	4.0	3.0	4.0
一人、外	0.5	0.0	1.3
家族、外	5.1	6.0	0.0
友だち、外	5.1	5.4	8.0

休日の活動は、時間帯との関連でみることが肝要である。したがって平均値でみてもあまり意味をなさないかも知れないが、それでもなお、他のグループと比較してみると、小学4年生では「テレビ」と「休養・寝る」が、小学6年生では「テレビ」が、中学2年生では「休養・寝る」が、多くなっている。このことが、この子どもたちの休日への期待を「することがなかったり、ダラダラ過ごしてしまうので、うれしくない」とさせてしまっているととらえられる。

そして、この子どもたちの意識は、相手に自分がどのように受け止められているのか自信がもてないでいたり、自己に対しても、自信や自分を大切に思う気持ちをもちにくかったりするのではないだろうか。

II 「休日の振り返り」と子どもたちの意識

図2-51 から2-53 は、設問9の選択肢別に示している。これらのグラフからは次のようなことがわかる。

- ① 休日が「楽しく過ごせたので、学校が楽しみだ」のグループが一番外側に、一番内側には、概ね、休日が「楽しくなかったので、学校に行きたくない」のグループがくるが、学年により個々の観点の数値の違いは、意識の対象や観点によって異なっている。
- ② 小学4年生では「楽しくなかった、学校に行きたくない」のグループの、友だちへの被受容感や自己への被容感、関与・行為などでマイナスの値となっている。
- ③ 小学6年生では、全体としてみると、「楽しくなかった、学校が楽しみ」の方が、「楽しく過ごせた、学校に行きたくない」よりも、低い値をとる観点が増える。また、「楽しくなかった、学校に行きたくない」では、親への受容感や友だちへの被受容感でマイナスの値となっている。
- ④ 中学2年生では、小学6年生と同じように、全体としてみると「楽しくなかった、学校が楽しみ」の方が、「楽しく過ごせた、学校に行きたくない」よりも、低い値をとる観点

図2-51 小4：休日の振り返り別子どもたちの意識

- ◆ 楽しく過ごせた、学校が楽しみ(590)
- ▲ 楽しくなかった、学校が楽しみ(70)
- 楽しく過ごせた、学校に行きたくない(472)
- ✱ 楽しくなかった、学校に行きたくない(25)

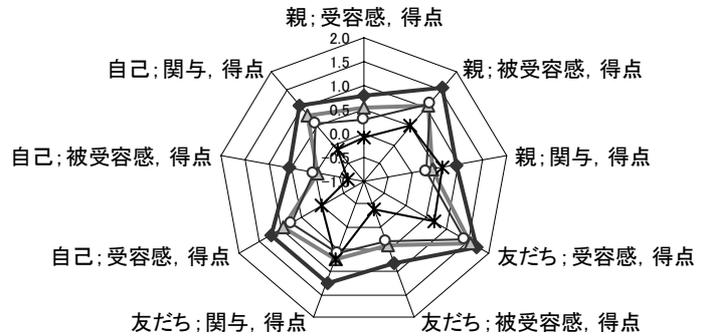


図2-52 小6：休日の振り返り別子どもたちの意識

- ◆ 楽しく過ごせた、学校が楽しみ(570)
- ▲ 楽しくなかった、学校が楽しみ(63)
- 楽しく過ごせた、学校に行きたくない(490)
- ✱ 楽しくなかった、学校に行きたくない(24)

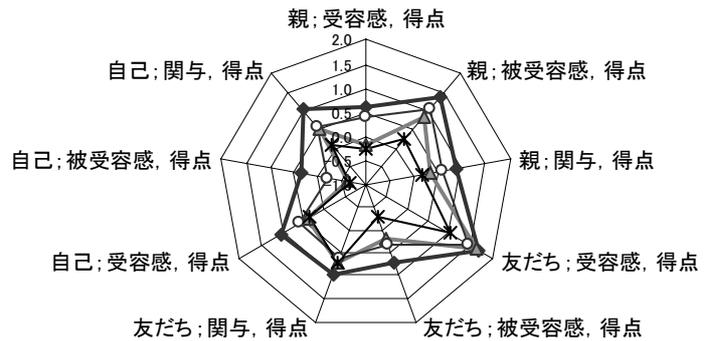
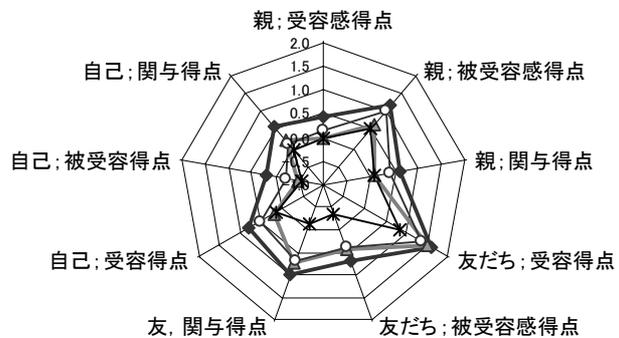


図2-53 中2：休日の振り返り別子どもたちの意識

- ◆ 楽しく過ごせた、学校が楽しみ(347)
- ▲ 楽しくなかった、学校が楽しみ(57)
- 楽しく過ごせた、学校に行きたくない(584)
- ✱ 楽しくなかった、学校に行きたくない(42)



が増える。また「楽しくなかった、学校に行きたくない」では、友だちへの被受容感や関与・行為で、他のグループとの値の開きが大きくなる。

つまり、子どもが休日を楽しく充実して過ごせることが、そして、自己や友だちへの意識を、肯定的にとらえられるようになっていくことが、学校生活に対しても、意欲的に充実して取り組めるのではないだろうか。

Ⅲ 「学校の体験や経験を、休日の生活に活かす； 休日の体験や経験を、学校の生活に活かす」と 子どもの意識

図2-54 から2-56 の《よくある》は、設問22・23の2つの設問の両方に選択肢1の「よくある」

図2-54 小4；学校生活と休日の生活別
子どもの意識

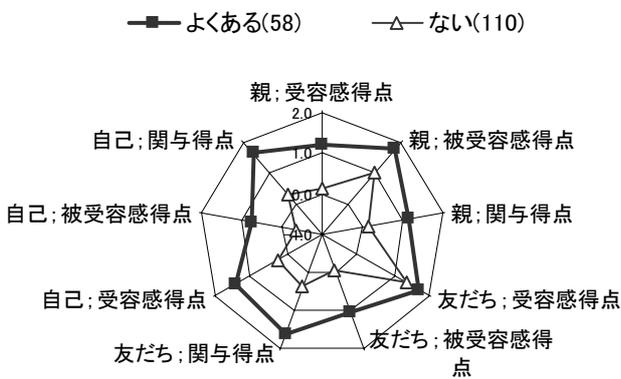


図2-55 小6；学校生活と休日の生活別
子どもの意識

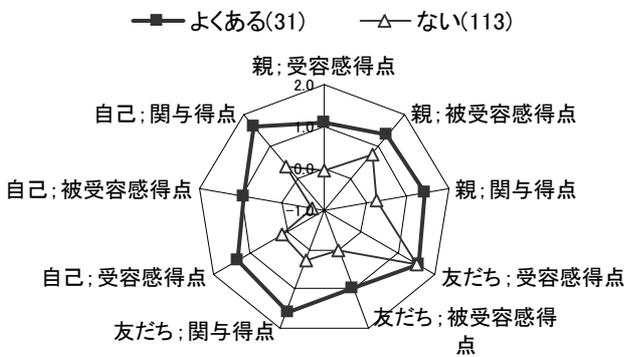
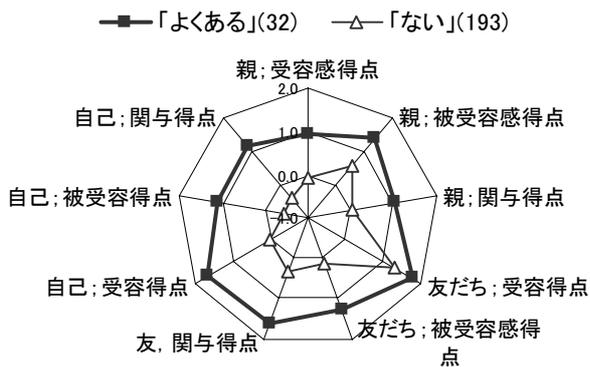


図2-56 中2；学校生活と休日の生活別
子どもの意識



を、《ない》は同じく2つの設問の両方に選択肢4の「ほとんどない」と回答した子どもを取り出し、この二群の子どもたちの意識を、学年ごとに比較したグラフである。

これらのグラフからは、次のようなことがわかる。明らかに、人とのかかわりや自己に対する意識に違いがある。

家族と過ごしたり、友だちと過ごしたり、そして、そこでの活動で得た知識や体験・経験が、学校生活に活かされたり、反対に、学校で得た知識や体験・経験を、家庭生活に活かす習慣が形成されることで、自己に対する意識も肯定的にとらえられるようになるのではないかと解釈できる。

そこで、この子どもたちの休日の過ごし方を、活動項目別に、平均値として表2-13に示す。

表2-13 「学校の経験を休日に・休日の経験を学校生活に、活かす」2群の休日の活動項目別平均値一覧

	小4		小6		中2	
	よくある	ない	よくある	ない	よくある	ない
勉強	15.8	8.5	15.1	13.3	4.2	4.1
読書	8.0	3.3	3.2	2.7	3.1	2.2
マンガ	3.4	4.2	2.2	4.1	0.0	4.7
電話	0.6	0.5	1.6	1.0	5.2	5.0
休養・寝る	8.9	13.0	5.4	10.3	13.0	16.9
テレビ	15.8	18.6	14.5	14.0	15.1	18.5
ゲーム	7.5	11.4	2.2	9.4	4.2	6.9
家族と	11.8	9.4	10.2	7.7	4.2	4.2
友だちと	3.2	2.6	4.3	3.8	4.2	2.9
習い事	5.7	3.8	3.8	3.5	1.0	1.9
学習塾	2.0	0.8	8.1	10.3	2.1	2.0
部活動	0.9	0.3	0.0	0.1	15.1	14.2
スポーツ	2.3	10.6	14.5	11.2	19.3	5.0
一人、外	1.1	2.0	1.1	1.0	1.0	1.6
家族、外	8.0	6.8	10.8	2.7	0.5	1.3
友だち、外	4.9	4.2	3.2	4.7	7.8	8.3

先にも述べたように、平均値なので数値の読みには慎重でなければならないが、しかし、それでもなお、学年ごとの《よくある》と《ない》の違いが表れているととらえられる。

《よくある》の小学4年生では「勉強」や「読書」が、小学6年生では「スポーツ」や「家族・外」が、中学2年生では「スポーツ」が、《ない》に比べて多くなっている。《ない》では3つの学年で「休養・寝る」が、小学4年生では「スポーツ」が、小学6年生では「ゲーム」が、中学2年生で

は「テレビ」や「マンガ」が、《よくある》に比べて多くなっている。「スポーツ」は、小学4年生では《ない》に、小学6年生では《よくある》に入っていることは、子どもの成長による意識の違いとしてとらえられる。

子どもの知的興味関心を喚起したり、家族と時間を共有したり、スポーツ活動を通してその技能を高めるとともに、同好の友だちと一緒に活動することが、休日の生活と学校生活をつなぐこととして有効ではないかということを示唆している。

IV 休日への願いと子どもの意識

図2-57から2-59は、設問24の「休日への願い」の選択肢のうち、「もっとひとりでのんびりしたい」の回答者を《のんびり》、「もっとやったことのないことをしてみたい」の回答者を《やったことのない》として取り出し、この二群の子どもたちの意識を、学年ごとに比較したグラフである。

毎日が時間に追われ忙しく生活している子どもは「のんびりしたい」と思うであろうし、未知のことに挑戦してみようとする子どもは、「やったことのないことをしてみたい」と思うのではなかろうか。これらのグラフからは、次のようなことがわかる。

《やったことのない》の方が《のんびり》に比べて、数値は高くグラフは外側に描かれる。また、この二群の数値の差は、学年が進むにしたがって、少しずつではあるが、縮まっていく。

このことは、《やったことのない》の数値の方が、《のんびり》に比べて、より学年の平均値に近いことを表わしている。つまり、《のんびり》と回答した小学4年生や小学6年生の友だちへの意識や自己への意識に差がみられることは、人とのかかわりを積極的に求めていないのではないかと、とらえることができる。

日常生活が休養の時間を取れないほど多忙であったり、気分転換や次の活動への鋭気を養うための「のんびり」であれば非難されるものではないが、結果として人とのかかわりを億劫に思ったり、ただ適当にテレビをつけて見ていることが「のんびり」することの具体的な内容でないことを願うのではあるが、休日に「ひとりでのんびりしたい」と願う子どもは、個別的に見ていくことが必要であると考える。

以上、休日前の気持ち、休日を振り返っての気持ち、休日の生活と学校生活とのかかわり、休日への願いの各設問を手がかりとして、子どもの意識をみてきた。

図2-57 小4；休日への願い別子どもの意識

—△— のんびり(103) —■— やったことのない(196)

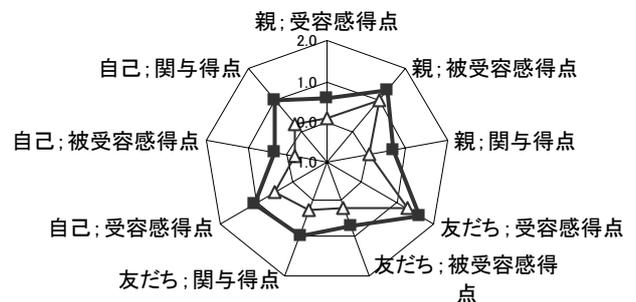


図2-58 小6；休日への願い別子どもの意識

—△— のんびり(196) —■— やったことのない(190)

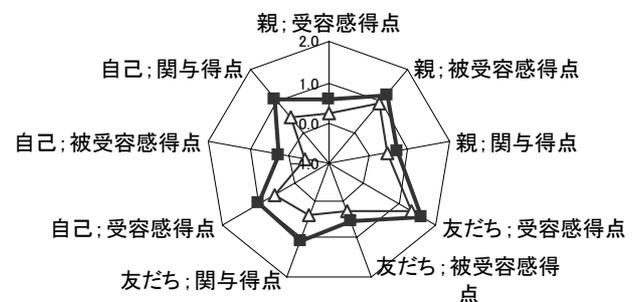
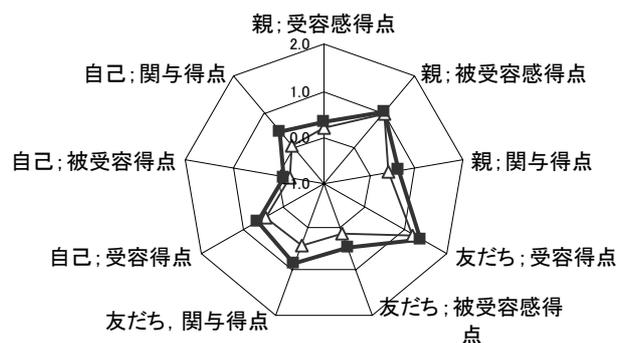


図2-59 中2；休日への願い別子どもの意識

—△— のんびり(252) —■— やったことのない(130)



- (11) 相関係数(ピアソンの積率相関係数): さまざまな変数間の関連の程度を、-1から+1の間の値で表される指標。なお、相関係数の解釈には 前掲(10)『社会調査の基礎』p.125を参照した。
- (12) クロス集計: 基本的には質的変数どうしの関連を見る統計処理の一方法。二つの変数のカテゴリーの組合せ別に度数を表にまとめたもの。
- (13) 内田伸子『発達心理学』放送大学教育振興会 2002 14章 無藤 隆 自己意識の発達 pp. 249~251

第3章 豊かな子どもの成長を願って

第1節 家庭生活を見つめ直す

前章では、子どもの休日の生活を、その活動項目に即して自発性や満足感、あるいは、休日の生活と学校生活のかかわりから、休日の家庭学習と授業の理解の程度との関連、また、休日への期待や振り返りを、親・友だち・自己に対する受け止めやかかわりなどの気持ちを「子どもの意識」として考察してきた。上述してきたように、子どもの生活では家庭生活と学校生活が深く関連していることが、改めて理解される。

ここでは、基本的生活習慣の項目として、休日の生活の特徴付けるものとしてとらえた「休日の昼食」、休日全体の振り返りと学校への意欲が反映されるものとしてとらえた「日曜日の就寝時刻」について考察する。

(1) 土曜日・日曜日の昼食

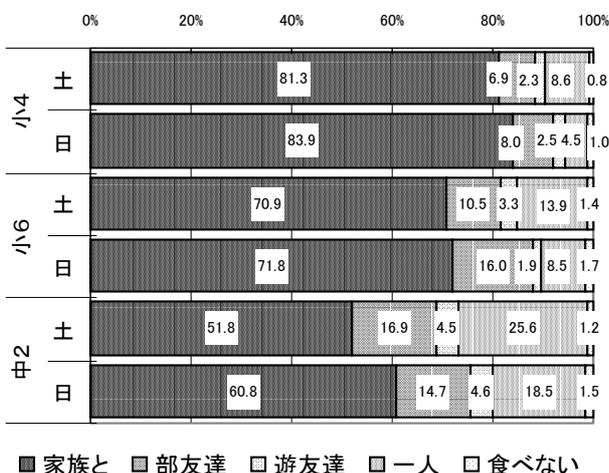
子どもたちは休日の昼間、様々な活動をしていることは、前章で確認できた。では、その休日には、だれと昼食を摂っているのだろうか。

下の図3-1は、《設問4：あなたは、土曜日と日曜日に、だいたいだれと昼ごはんを食べていますか》の回答結果を、学年別に示している。選択肢としては、「家族と」「学習塾やスポーツクラブ、学校の部活動の友だちと」「遊んでいる友だちと」「自分ひとりで」「食べていない」の5つとした。

このグラフからは、次のことがわかる。

- ① 家族と一緒に摂る子どもが、土曜日より日曜日に増える。
- ② 小学生では日曜日に「部友だち」が少し増えること、中学生では反対に少し減る。

図3-1 休日の昼食の様子



③ 「自分ひとりで」と回答した子どもは、日曜日には減るものの、それでも小学4年生で5%、小学6年生で10%、中学2年生では20%程度いる。

④ 「食べていない」と回答した子どもは、極めて少ないものの、1・2%いる。

それぞれの家庭の事情もあるので、すべてを一律にとらえることはできないが、ここでは、「自分ひとりで」「食べていない」の二群に絞って考察する。

表3-1には、土曜日および日曜日の昼食を「一人で」と回答した子どもの、昼間の活動項目別人数を、表3-2には、同じく「食べていない」と回答した子どもの、昼間の活動項目別人数を、どちらも小学6年生の場合で示した。

表3-1 小6；土・日の昼食「一人で」、活動項目別人数

人数	159		97	
	土・午前	土・午後	日・午前	日・午後
勉強	19	9	9	4
読書	4	4	1	1
漫画	10	5	5	6
電話	1	1	2	2
寝る	26	5	19	9
テレビ	35	15	19	10
ゲーム	12	14	5	10
家族と	3	3	3	3
友達と	8	24	3	14
習い事	11	13	5	3
塾	4	14	5	5
部活	7	2	0	0
スポーツ	11	16	14	6
一人外	0	2	1	2
家族外	0	5	0	8
友達外	8	27	6	14

表3-2 小6；土・日の昼食「食べていない」活動項目別人数

人数	16		20	
	土・午前	土・午後	日・午前	日・午後
勉強	2	2	0	1
読書	2	1	1	1
漫画	1	0	0	0
電話	0	0	1	1
寝る	6	0	8	0
テレビ	4	2	3	2
ゲーム	0	3	2	4
家族と	0	0	1	0
友達と	0	2	0	1
習い事	0	2	1	0
塾	0	2	1	1
スポーツ	1	1	1	1
一人外	0	1	0	2
家族外	0	0	0	1
友達外	0	0	1	5

「一人で」では「食べていない」に比べ、活動の項目は多様であるが、比較的人数が多いのは、午前では「テレビ」「寝る」「勉強」が、午後では「友だちと」「友だち外」「寝る」などである。「食べていない」では活動は午後には多様になるものの、午前では「寝る」「テレビ」が多いと言える。

次に、土曜日の昼食を「一人で」と回答した子どもたちの、休日への期待を学年全体のデータと比較したグラフを図3-2に、日曜日の昼食を「一人で」「食べていない」と回答した子どもたちの休日の振り返りのグラフを図3-3・3-4に示す。

これらのグラフを学年全体と比較すると、図3-2では、「家族と」が減り、その分「やりたいこと」が増えている。図3-3では、「楽しく過ごせた、学校が楽しみ」が減り、「楽しく過ごせた、学校に行きたくない」が増えることと、小学生では「楽しくなかった、学校に行きたくない」も増えている。図3-4では、該当する人数は極めて少ないものの、図3-3の結果に加えて、中学2年生で「楽しくなかった、学校に行きたくない」が増えていることと、小学6年生では「楽しくなかった、学校が楽しみ」が増えている。

表3-3には、土曜日の昼食を「一人で」「食べていない」と回答したその子どもたちのうち、日曜日の昼食を「一人で」「食べていない」と回答した子どもの人数を挙げた。

表3-3 土・昼食を、「一人で・食べていない」人数別
日・昼食を、「一人で・食べていない」人数

		日 曜 日 ・ 昼 食					
		小 4		小 6		中 2	
		一人で	食べていない	一人で	食べていない	一人で	食べていない
土曜日・昼食	小4	一人で(100)	34	2			
	食べていない(9)	0	5				
小6	一人で(159)			67	4		
	食べていない(16)			2	7		
中2	一人で(264)					144	6
	食べていない(12)					2	5

土・日の昼食を2日とも「一人で」食べている子どもは、小学4年生3%、小学6年生6%、中学2年生14%、2日とも「食べていない」は0.5%で、全市各学年の児童・生徒数で換算すれば、およそ55人であるが、見逃すことのできない数字ではないだろうか。

家庭によって事情は様々であろうが、休日の昼食を「自分ひとりで」「食べていない」ということが、常態化していないかどうか、一人ひとりの生活の背景にまで迫った過ごし方の把握が必要ではないだろうか。

図3-2 土・昼食；「一人で」の休日への期待

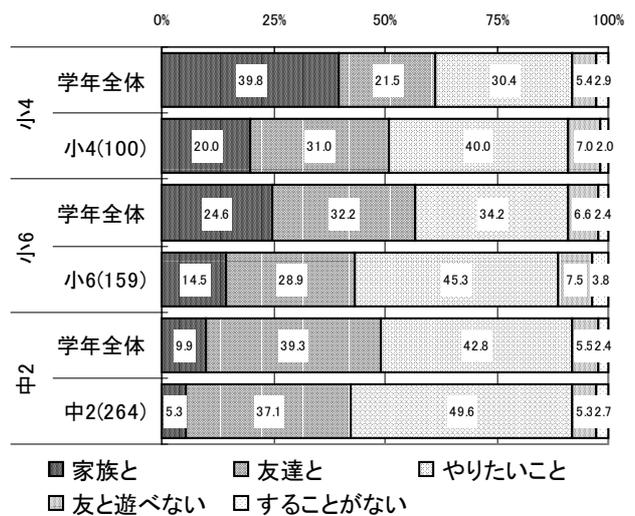


図3-3 日・昼食；「一人で」の休日の振り返り

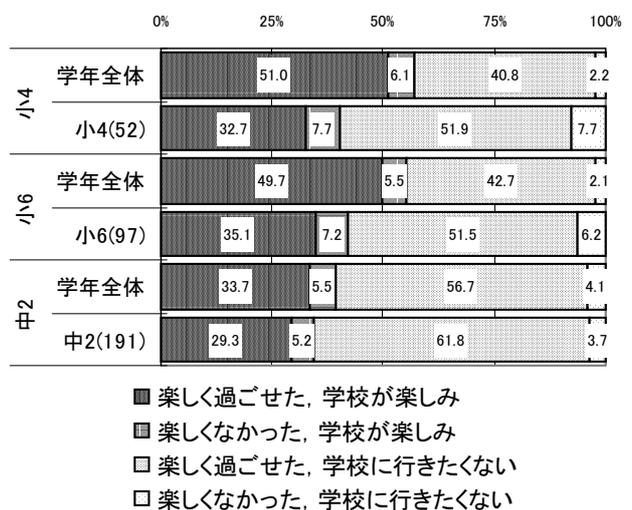
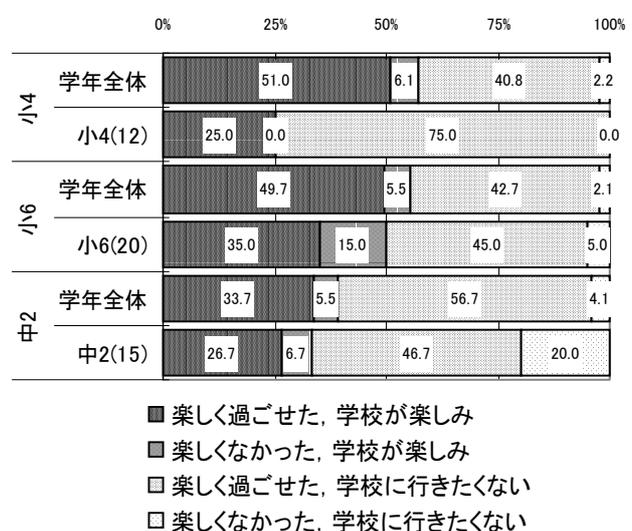


図3-4 日・昼食；「食べていない」の休日の振り返り



(2) 日曜日の就寝時刻

日曜日の就寝時刻については、前章で「休日の振り返り」と関連づけ考察した(p.22)。ここでは、昨年度の調査結果と比較しながら考察する。

昨年度の設問は《学校のある日、あなたはだいたい何時に寝ていますか》で、選択肢は本年度調査と同一である。

図3-5に、学年別に昨年度と本年度の調査結果を、表3-4には、就寝時刻が12時以降の割合を示した。(H. 15の調査人数はp.24参照)

図3-5 就寝時刻；昨年度との比較

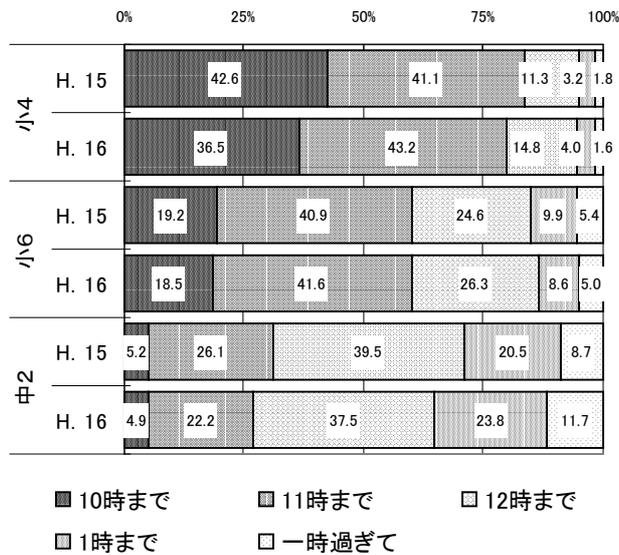


表3-4 就寝時刻；12時以降の割合

小学4年生		小学6年生		中学2年生	
H. 15	H. 16	H. 15	H. 16	H. 15	H. 16
5.0	5.5	15.3	13.6	29.2	35.4

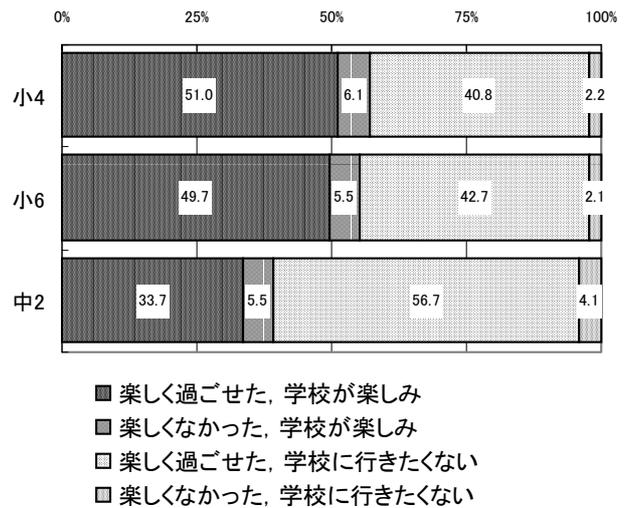
これらの図と表の、特に、就寝時刻が「12時以降」に注目すると、中学2年生の方が小学生に比べて、本年度の調査結果で遅い時間帯になっていることがわかる。つまり、小学生では日曜日の就寝時刻は平日の就寝時刻と変わらないが、(小学6年生では平日よりも早く寝ている子どもが増えている)中学生では6%ほど多くなっている。

では、なぜそうなるのだろうか。ここでは、設問9の回答結果を、図3-6で見ることにする。

図3-6からもわかるとおり、小学4年生と6年生では回答結果に大きな違いはないが、中学2年生では、小学生に比べ「楽しく過ごせた、学校が楽しみ」が減り、その分「楽しく過ごせた、学校に行きたくない」が増えている。

ところで、日曜日の就寝時刻が「午前1時を過

図3-6 設問9；休日の振り返り



過ぎて」と回答した中学2年生について、クラスの1割の子どもは、月曜日の朝、学校生活にスムーズに入ってきていないのではないかと述べた(p.22)。図3-5、中学2年生の11.7%、図3-6、同じく中学2年生の56.7%は、決して小さくない数字ではないかと考える。

休日を楽しく充実して過ごす活力を、学校のある平日の生活につないでいく努力が必要ではないかと強く思う。

第2節 学校生活を見つめ直す

(1) 授業や学校の楽しさ

前章では、「休日の振り返り」を中心にして「学級への関与」や「学校生活の楽しさ」との関連について考察した。そして、さらに「学級への関与」と「学校生活の楽しさ」との関連についても考察した。(p.23 図2-38から2-40)

ここでは、学校生活と休日の生活との関連について、相関係数を挙げながら考察する。

相関係数の読み取りや解釈には慎重でなくてはならないが、2つの設問における関連の程度を把握する指標として取り上げることにしたい。

まず、「休日の振り返り」と「学級への関与」「学校生活の楽しさ」について見ることにする。表3-5に相関係数を示す。

表3-5 「休日の振り返り」にかかわる相関係数

	休日の振り返り		
	小学4年生	小学6年生	中学2年生
学級への関与	0.21	0.20	0.28
学校生活の楽しさ	0.51	0.45	0.37

この表からは、次のことがわかる。

- ① 休日の振り返りと学級への関与では、中学2年生のほうが小学生に比べて、上回っている。
- ② 休日の振り返りと学校生活の楽しさでは、学年が進むにしたがって値は下がるが、中学2年生でも0.37と「ある程度の相関がある」数値が算出された。

次に、「学校生活の楽しさ」と「学級への関与」「授業の理解度」について見ることにする。表3-6に相関係数を示す。

表3-6 「学校生活の楽しさ」にかかわる相関係数

	学校生活の楽しさ		
	小学4年生	小学6年生	中学2年生
学級への関与	0.29	0.29	0.35
授業の理解度	0.29	0.23	0.11

この表からは、次のことがわかる。

- ③ 学校生活の楽しさと学級への関与では、これも小学生より中学2年生のほうが上回っている。
- ④ 学校生活の楽しさと授業の理解度では、学年が進むにしたがって下がっている。

以上①から④までのことは、次のように解釈できる。

学校生活の楽しさは、小学4年生では、学級への自己のかかわりと授業内容の理解が同程度相関するが、学年が進むにしたがって、授業内容の理解よりも学級への自己のかかわりの意識が優勢となる。このことは、子どもの人とのかかわりが次第に広がり、学校生活では友だちとの関係が、学校生活の楽しさにかかわってくるのではないかと考えられる。

また、休日の生活と学級へのかかわりをみると、休日を楽しく充実して過ごすことが、学校生活全般に対しても良好な結果をもたらしているのではないかと解釈できる。

ところで前章では、設問22「学校での経験を休日に活かす」と、設問23「休日の経験を学校で活かす」について考察し、学校生活と休日の家庭生活が、双方向的にかかわりあっている子どもと、何ら関連していない子どもとに分かれているのではないかと考察した。(p.23 図2-40から2-42)

そこで、この2つの設問の相関係数を学年別に表3-7に示すと、比較的高い数値が算出された。

そこで次に、この設問23、「休日の経験を学校で活かす」と「学級への関与」「学校の楽しさ」の相関係数を表3-8に示す。

表3-7 設問22と設問23の相関係数

	休日の経験を活かす		
	小学4年生	小学6年生	中学2年生
学校の経験を活かす	0.39	0.41	0.50

表3-8 「休日の経験を学校で活かす」と

「学級への関与」「学校の楽しさ」の相関係数

	休日の経験を学校で活かす		
	小学4年生	小学6年生	中学2年生
学級への関与	0.29	0.27	0.31
学校生活の楽しさ	0.27	0.23	0.17

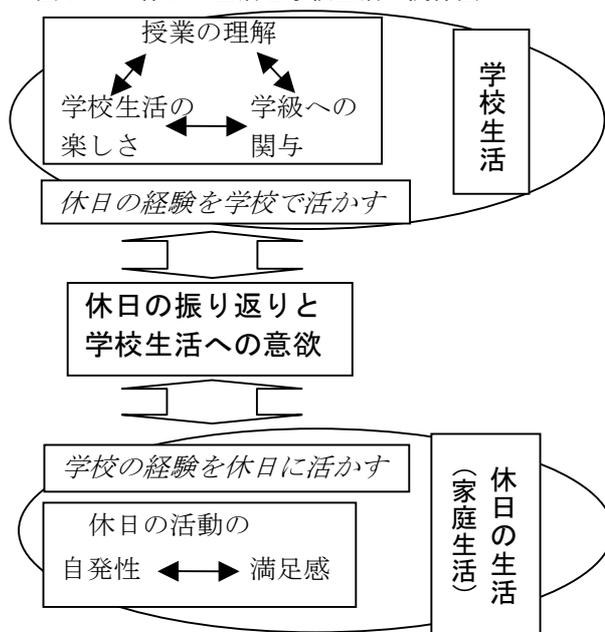
この表3-8、中学2年生に見られる「学校の楽しさ」よりも「学級への関与」で数値が高くなっていることについては不明であるが、前述の②・③に述べたことに関連付け解釈すれば、

- ⑤ 「学級への関与」で0.3程度の数値から、子どもの休日の生活と学校生活を繋ぐものとして「友だちとのかかわり」が大きな要因となっていると指摘できるのかも知れない。

このことから、「休日の振り返り」と「休日の経験を学校生活に活かす」ことが、学校生活と休日の生活を関係付けるポイントとなっているのではないかと。そしてさらに、「毎日の生活」にかかわるのではないだろうか。

これらの関係を整理してを図3-7に示す。

図3-7 休日の生活と学校生活の関係図



前項では、休日を楽しく充実して過ごす活力を、学校のある平日の生活につないでいく努力が必要ではないかとも述べた。

以上のように考えてくると、子ども自身が土曜日・日曜日の生活を主体的に過ごし、よりよい過ごし方ができるよう「振り返る力」「休日の経験を学校で活かす力」をつけていくことが大切なこととして浮かび上がってくるのではないだろうか。

(2) 豊かな成長への支援の視点

子どもの休日の生活の実態を分析しながら、学校生活との関連において調査結果を報告してきた。

多くの子どもが多様な活動をしている休日の午後には「休養する・寝ている」と回答した子どもでは、午前中も休養したり寝ていたりしている可能性や休日の夜に「外で遊んでいる」と回答した子どもは、休日全体を振り返ると「楽しく過ごせたので、学校に行きたくない」と回答している。

この「休みの日が楽しく過ごせたので、学校に行きたくない」の回答傾向は、小学4年生では40.8%、小学6年生では42.7%、中学2年生では56.7%と学年が進むにしたがって増えている。

しかし、「休日の振り返りと子どもの意識」で明らかにしたように、休日を楽しく充実して過ごせることが、また、自己や友だちへの意識が肯定的にとらえられるようになっていくことが、学校生活に対しても意欲的に、充実して取り組めるのではないかと考えられる。

休日の活動では自発性と満足感の分析から、活動の内容によっては、必ずしも自発的に活動していなくても「自分はやればできる」「苦手なことを克服するために努力している」などの自己への意識の受け止めに違いがあることを指摘した。

そして、休日の学習の取組を、学校生活の楽しさや授業の理解度などに関連づけて考察し、学級で、休日に勉強する雰囲気や醸成される必要があることを述べた。子ども自身が学校と家庭で得た知識や体験、あるいは経験が、双方向的に活かされる実感をとおして、子どもの毎日の生活が豊かで、自己の将来の生き方につながっていくのではないだろうか。

そうだとするのなら、充実した楽しい休日の生活が学校のある平日の生活につながっていく、その支援の視点を以下に指摘しておきたい。

I 的確な把握

子どもの何気ない素振りや言動、あるいは友だちの様子を見逃さず、子どもの休日の生活を把握することが必要である。また、家庭訪問などを通して見せる学校とはまた違う子どもの様子から、子どもの実状の把握と次の手立ての模索のた

めに、子どもと話し込んだり、保護者の願いを聞くということも、言うまでもなく重要である。

家庭の状況や子どもの気持ちを大切にしながら、今、その子に必要と思われることを、保護者の理解と協力を得ながら、子どもの成長にとって必要な視点を明示していくことが大切であると、改めて考える。

II 適確な支援

休日の子どもの生活は、基本的にはそれぞれの家庭の教育(方針)に委ねられる。親子の共同を通じ、子どもの成長がはぐくまれていく。必要以上に、介入すべきではないという意見もあるが、本調査結果では、休日前に「ひとりでやりたいことができるので、うれしい」、土・日の過ごし方は「その時になって、適当に決める」、休日にもっとこうしたいと思うことは「もっとひとりでのおんびりしたい」など、自ら積極的に人とかかわりをもとうとせず、「やりたいこと」や「のおんびり」の内実が空疎である様子が見受けられたことから、こうした子どもや家庭に必要な手立てを学校が講じることは当然である。

「気になるときには、家庭訪問をする」とは、先輩の先生に教えてもらったことである。また、「電話で済ませず、ちょっと寄って来い」とも教えてもらってきた。やはり子どもや保護者の姿を直に見て、気持ちを汲み取っていくことの大切さを指摘してのことである。なかなか困難なことであっても、まず対話をするところから始まる。そこから次の展望も開けていくのではないかと考える。

おわりに

変化の激しい社会にあって、学校では毎日のように新しいことが提示され、実に様々な取組がなされている。ともすればそのことの対応に追われてしまいがちである。「勉強することの意味」が見出しにくくなっている社会である。子どもにわかる言葉で、何を大事にして生きるのかを、折に触れ語ることが必要ではないかと痛感している。

なお、本調査の質問紙については、CD-ROMに掲載しているので各学校で自校の子どもの生活実態の把握のために、活用していただくと有難い。

2年間に亘る調査には、小学校26校、中学校19校の多くの学校の児童・生徒に調査の協力をいただいた。子どもたちの豊かな成長を願って、子どもたちには勿論のこと、関係の皆様にも心よりお礼を申し上げます。

【付表】 基礎集計表

学 年	小 学 4 年 生						小 学 6 年 生						中 学 2 年 生					
	土 曜 日			日 曜 日			土 曜 日			日 曜 日			土 曜 日			日 曜 日		
設問1 時間帯別活動	午前	午後	夜	午前	午後	夜	午前	午後	夜	午前	午後	夜	午前	午後	夜	午前	午後	夜
1 勉強する	21.1	6.8	8.0	14.8	8.0	8.5	18.5	6.2	10.8	11.4	8.8	13.5	3.9	2.8	5.1	4.9	3.2	8.7
2 本を読む	4.5	2.1	5.8	4.0	3.5	6.1	4.1	1.3	3.7	2.4	1.8	4.0	1.6	1.7	3.2	0.7	1.5	2.8
3 雑誌やマンガを読む	4.0	2.4	5.4	4.2	3.8	4.8	3.7	2.3	5.2	3.8	3.1	4.8	1.9	3.0	4.7	2.9	4.0	5.2
4 電話で喋る、メールをする	0.6	0.3	0.6	0.3	0.2	0.9	0.4	0.6	2.8	1.0	0.7	2.4	1.3	2.3	12.7	1.0	1.4	13.2
5 休養する、寝ている	11.2	2.2	12.4	13.6	2.4	12.7	18.2	3.1	6.7	22.2	3.0	9.4	24.4	7.5	7.1	35.1	7.7	9.4
6 テレビやビデオを見る、音楽をきく	15.2	7.4	33.8	21.2	7.1	30.9	17.3	7.1	35.6	14.9	7.1	31.0	5.7	11.0	35.2	8.3	7.5	35.3
7 ゲームをする	8.2	11.7	7.3	5.8	12.1	7.3	5.1	6.4	5.0	4.3	7.4	4.4	2.3	6.6	7.1	3.1	7.8	5.6
8 家族と過ごす	5.4	5.3	22.0	7.5	6.9	23.8	3.5	2.7	22.7	5.4	5.1	25.8	0.9	1.8	9.5	2.1	3.3	14.0
9 友達と家の中で遊ぶ	3.0	9.5	0.4	1.6	6.5	0.3	2.6	11.9	0.2	1.7	8.9	0.1	0.7	6.2	0.4	0.4	6.8	0.5
10 習い事に行く(学習塾以外)	6.6	13.2	1.5	5.0	1.5	0.2	5.1	8.5	1.2	4.4	2.2	0.4	1.2	4.4	1.6	2.0	1.0	0.4
11 学習塾に行く	1.5	5.1	0.3	0.3	0.5	0.0	3.0	10.4	3.2	5.7	5.9	1.2	0.5	1.7	10.3	0.3	0.7	0.1
12 部活動に行く	1.6	0.9	0.1	0.2	0.3	0.0	1.8	1.0	0.0	0.3	0.1	0.0	41.7	19.5	0.0	23.9	16.9	0.0
13 スポーツクラブの活動に行く	9.7	10.2	0.1	9.9	8.0	0.0	11.9	14.8	1.0	15.6	12.7	0.1	12.2	7.9	1.0	9.0	7.9	0.4
14 ひとりで外に出かける	0.9	1.3	0.4	1.6	1.6	0.3	0.3	1.2	0.3	0.9	1.7	0.3	0.8	1.9	0.1	0.9	3.7	0.7
15 家族と出かける	2.9	8.4	1.9	7.2	25.8	3.8	1.1	8.1	1.4	3.6	19.5	2.3	0.4	1.7	0.9	3.0	7.1	1.7
16 友達と出かける、外で遊ぶ	3.8	13.3	0.1	2.9	11.9	0.5	3.5	14.4	0.3	2.5	11.9	0.2	0.7	19.9	1.2	2.4	19.8	1.8
設問2 活動前の自発性	午前	午後	夜	午前	午後	夜	午前	午後	夜	午前	午後	夜	午前	午後	夜	午前	午後	夜
1 自分から、したかった	66.9	71.3	74.2	69.8	75.1	72.3	74.6	76.2	72.7	74.7	74.5	71.1	75.3	77.6	79.0	78.3	80.6	81.6
2 自分から、少しぐらいはしたかった	22.8	19.8	16.6	19.5	17.2	18.8	17.5	17.4	20.7	16.2	18.1	19.8	15.8	15.6	11.8	14.6	13.8	11.7
3 自分では、あまりしなかった	8.0	7.2	6.4	7.8	6.1	5.9	7.1	5.2	5.5	7.1	5.8	7.1	7.3	5.6	6.9	5.3	4.2	5.4
4 自分では、まったくしなかった	2.2	1.7	2.9	2.9	1.6	3.0	0.8	1.1	1.1	1.9	1.6	2.0	1.6	1.2	2.2	1.8	1.5	1.3
設問3 活動後の満足感	午前	午後	夜	午前	午後	夜	午前	午後	夜	午前	午後	夜	午前	午後	夜	午前	午後	夜
1 やってよかった、楽しかった	55.4	69.0	60.8	59.4	72.7	63.0	57.1	69.5	55.7	62.1	72.4	56.8	59.2	64.5	59.6	62.5	68.8	63.6
2 まあよかった、楽しかった	33.4	23.0	28.4	30.3	19.6	25.8	33.0	25.5	36.1	27.2	21.8	31.7	31.7	28.2	30.9	29.4	25.0	28.3
3 あまりよくなかった、楽しくなかった	8.6	5.4	8.0	8.2	6.1	7.7	7.8	4.0	6.7	9.1	4.7	9.4	6.7	5.9	7.1	5.4	4.5	6.2
4 まったくよくなかった、楽しくなかった	2.5	2.6	2.8	2.2	1.6	3.5	2.1	1.0	1.5	1.7	1.1	2.0	2.3	1.5	2.4	2.6	1.7	1.9

質問文	選 択 肢			小学4年生	小学6年生	中学2年生
設問4 あなたは、土曜日と日曜日に、だいたいどれと屋ごはんを食べていますか。	土 曜 日					
	1 家族と	81.3	70.9	51.8		
	2 学習塾やスポーツクラブ、学校の部活動の友達と	6.9	10.5	16.9		
	3 遊んでいる友達と	2.3	3.3	4.5		
	4 自分ひとりで	8.6	13.9	25.6		
	5 食べていない	0.8	1.4	1.2		
	日 曜 日					
	1 家族と	83.9	71.8	60.8		
	2 学習塾やスポーツクラブ、学校の部活動の友達と	8.0	16.0	14.7		
	3 遊んでいる友達と	2.5	1.9	4.6		
4 自分ひとりで	4.5	8.5	18.5			
5 食べていない	1.0	1.7	1.5			
設問5 あなたは、日曜日の夜、だいたい何時に寝ていますか。	1 10時までに寝ている	36.5	18.5	4.9		
	2 10時～11時までに寝ている	43.2	41.6	22.2		
	3 11時～12時までに寝ている	14.8	26.3	37.5		
	4 12時～午前1時までに寝ている	4.0	8.6	23.8		
	5 午前1時を過ぎてから寝ている	1.6	5.0	11.7		
設問6 あなたは、土曜日や日曜日、友だちを誘って遊びますか。	1 自分から友だちを誘うことが多い	13.0	10.7	7.6		
	2 自分から誘ったり、友だちから誘われたりする	41.9	44.0	59.0		
	3 友だちに誘われることが多い	16.9	19.3	20.8		
	4 自分から誘うことも、友だちから誘われることもない	28.2	26.0	12.6		
設問7 あなたは、土曜日や日曜日の休みの日がくる前には、どのような気持ちになりますか。	1 家族といっしょに過ごせるので、うれしい	39.8	24.6	9.9		
	2 友だちといっしょに過ごせるので、うれしい	21.5	32.2	39.3		
	3 ひとりでやりたいことができるので、うれしい	30.4	34.2	42.8		
	4 学校で友だちと遊んだりできないので、うれしくない	5.4	6.6	5.5		
	5 することがなかったり、だらだら過ごしてしまうので、うれしくない	2.9	2.4	2.4		
設問8 あなたは、土曜日や日曜日の過ごし方を、どのように決めていますか。	1 自分で決めている	32.2	43.6	43.9		
	2 家族に合わせて決めている	22.3	12.6	4.3		
	3 友だちに合わせて決めている	1.6	1.3	1.9		
	4 その時になって、適当に決めている	44.0	42.5	49.9		
設問9 あなたは、日曜日の夜に寝るとき、どのような気持ちになることが多いですか。	1 休みの日が楽しく過ごせたので、学校に行くのが楽しみだ	51.0	49.7	33.7		
	2 休みの日が楽しく過ごせなかったので、学校に行くのが楽しみだ	6.1	5.5	5.5		
	3 休みの日が楽しく過ごせたので、学校に行きたくない	40.8	42.7	56.7		
	4 休みの日が楽しく過ごせなかったので、学校に行きたくない	2.2	2.1	4.1		

質問文	選 択 肢	小学4年生	小学6年生	中学2年生
設問10 あなたは、家の人の注意を素直に聞くことができますか。	1 できる 2 まあできる 3 あまりできない 4 できない	14.9 58.7 21.2 5.3	11.4 57.8 25.4 5.4	9.0 52.2 30.4 8.3
設問11 あなたは、家の人に大事にされていると思いますか。	1 そう思う 2 まあそう思う 3 あまり思わない 4 思わない	58.6 29.7 7.9 3.8	48.4 37.3 9.9 4.4	37.6 47.1 10.5 4.9
設問12 家の人に対して、あなたが悪いことをしたと思ったとき、自分から謝りますか。	1 自分から謝る 2 だいたい自分から謝る 3 あまり自分から謝らない 4 ほとんど自分から謝らない	29.2 43.2 18.5 9.1	28.2 46.5 18.7 6.6	22.3 44.0 23.2 10.5
設問13 あなたの周りの友だちは「いい友だちだ」と思いますか。	1 そう思う 2 まあそう思う 3 あまりそうは思わない 4 思わない	68.6 25.4 4.6 1.4	66.8 28.3 3.6 1.3	58.3 34.7 5.4 1.7
設問14 あなたは、友だちに信頼されていると思いますか。	1 そう思う 2 まあそう思う 3 あまりそうは思わない 4 思わない	22.9 48.2 20.6 8.3	14.3 55.8 24.1 5.8	11.7 57.6 24.8 6.0
設問15 あなたは、友だちが困っているとき、自分から助けていますか。	1 自分から助けている 2 だいたい自分から助けている 3 あまり自分から助けていない 4 ほとんど自分から助けていない	31.9 51.0 13.4 3.7	23.2 56.4 17.5 2.9	20.9 56.8 19.4 2.9
設問16 あなたは、「自分はやればできる力を持っている」と思いますか。	1 そう思う 2 まあそう思う 3 あまりそうは思わない 4 思わない	41.1 39.3 15.0 4.6	33.7 41.9 18.1 6.3	28.0 39.8 24.4 7.9
設問17 あなたは、今の自分のことを好きだと思いますか。	1 そう思う 2 まあそう思う 3 あまりそうは思わない 4 思わない	21.3 40.2 24.0 14.4	15.5 36.1 30.9 17.5	12.1 35.8 31.9 20.1
設問18 あなたは、自分の苦手なことを克服(うちかつ)ことするために、努力していますか。	1 努力している 2 まあ努力している 3 あまり努力していない 4 ほとんど努力していない	32.9 44.9 17.7 4.4	30.2 45.1 20.8 3.9	18.5 41.1 31.7 8.7
設問19 あなたは、学級の活動に積極的に取り組んでいると思いますか。	1 積極的に取り組んでいると思う 2 どちらかといえば、積極的に取り組んでいると思う 3 どちらかといえば、積極的に取り組んでいないと思う 4 積極的に取り組んでいないと思う	21.6 56.1 18.2 4.1	14.7 49.1 28.9 7.3	19.6 43.7 24.4 12.3
設問20 あなたは、学校の授業がどれくらいわかりますか。	1 とてもよくわかる 2 だいたいわかる 3 わかりにくいことが多い 4 ほとんどわからない	31.9 55.5 10.7 1.9	25.5 62.4 9.9 2.3	12.2 62.2 21.5 4.1
設問21 あなたは、毎日の学校生活が楽しいですか。	1 とても楽しい 2 まあまあ楽しい 3 あまり楽しくない 4 全然楽しくない	40.3 44.2 10.6 4.9	37.8 48.3 10.2 3.7	30.1 54.4 9.5 6.0
設問22 あなたは、学校の授業や活動で体験や経験したことを、土曜日・日曜日に、さらに「やってみよう」としたことがありますか。	1 よくある 2 わりとある 3 あまりない 4 ほとんどない	12.4 27.0 36.1 24.5	6.8 22.3 45.2 25.6	7.2 13.3 41.6 38.0
設問23 あなたは、土曜日や日曜日の体験や経験が、学校の授業や活動に、役立ったことがありますか。	1 よくある 2 わりとある 3 あまりない 4 ほとんどない	16.0 36.6 30.6 16.8	13.0 34.8 36.8 15.4	8.6 24.6 43.6 23.2
設問24 あなたが土曜日や日曜日の生活で、もっとこうしたいと思うことはどのようなことですか。	1 もっと家族と過ごしたい 2 もっとたくさんの友だちと過ごしたい 3 もっとひとりでのんびりしたい 4 もっといろいろなところへ行ってみみたい 5 もっとやったことのないことをしてみたい	27.4 20.1 8.9 26.7 16.9	11.1 24.7 17.1 30.6 16.6	6.6 27.4 24.5 28.9 12.6

注) 結果数値(%)は表章単位未満を四捨五入してあるので、内訳の合計に一致しないことがある。